

シーボルト蘭文修業証書

## 《論文》

- 西山砂保あてシーボルト蘭文修業証書の解読  
松田 清
- 大森文庫の価値について  
梶谷 光弘
- 大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」  
小林奈緒子

## 《報告》

- JapanKnowledge Lib.を活用した研究  
田籠 博
- ラーニングコモンズ  
利用実態調査からみる利用傾向 金子 尚登

## 《自著紹介》

川瀬雅也・楨原 茂・山崎 亮・西野義彰

種思画妙筆功明新入  
扇上之書也善理畫所  
肉之六銘倚編挂枚於  
仁者ノ少思方其林伴其  
終古推秀

粹典範題



西山砂保肖像画  
松村氏藏



大森泰輔自画像



華岡青洲肖像画（大森泰輔筆）

いずれも島根大学医学図書館（大森文庫）所蔵

## 巻頭言

新たな方針で編集された「淞雲」の再出発に際して、巻頭の辞を記すよう求められた。館長として多少の責任を感じる点もあり、いくらか事情を述べて責めをふさぎたい。

4年前に館長として就任したとき、図書館職員にたいして一つの希望を述べました。館員それぞれが、日常の活動業務とはべつに、みずから課題を設けてそれを達成すべく努めることを求めたのです。

図書館を利用する立場からは、館員は図書の出納という単純な作業に従うだけに見えるかもしれませんが、その内情は意外に複雑です。膨大な蔵書の出入りを適切に管理するのはもちろんですが、たんなる本の番人ではありません。図書館が所蔵する貴重資料の閲覧・複製依頼への対応、雑誌や電子ジャーナルの購入、資料のデジタル化やアーカイブの適切な維持管理など、利用者の目に触れないところで多くの労力が払われています。

私が望んだのは、それらの日常業務に埋もれることなく、わずかな時間を盗んでも自らが見出す課題を見出し、それに取り組むという相当に無理なことでした。

取り組みを行えばその成果を発表する場が必要です。当初は紀要の刊行を考えていたのですが、「淞雲」の編集方針を刷新することでそれに代えることにより本号が誕生することになりました。

収める記事を見ると、館蔵の貴重資料についての論考が2編、拙文は場所ふさぎとしても、他に職員の報告が2編含まれていることを喜ぶたいと思う。原稿を寄せていただいた各位にお礼を申し上げます。

附属図書館には職員もまだ知らない貴重資料が埋もれている可能性があります。また、職員の日々の業務についても改善を工夫する余地があるかもしれず、それらを文字の形で報告することで図書館共通の財産にすることができます。

本誌が今後ますます内容充実していくことを祈念するしだいです。

2015（平成27）年3月27日

島根大学学術情報機構附属図書館長 田籠 博



---

# 松雲

第17号 2015.3.27 発行

## 《巻頭カラー》

《巻頭言》…………… 田籠 博 3

## 《論文》

西山砂保あてシーボルト蘭文修業証書の解説…………… 松田 清 6

大森文庫の価値について

—華岡流医術の真髄とその地方伝播の実態を解明する鍵—…………… 梶谷 光弘 13

大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」

—企画展「戦争と平和を考える2014」より— …………… 小林奈緒子 32

## 《報告》

JapanKnowledge Lib.を活用した研究 …………… 田籠 博 50

ラーニングコモンズ利用実態調査からみる利用傾向…………… 金子 尚登 55

## 《自著紹介》

経験のアルケオロジ —現象学と生命の哲学 …………… 川瀬 雅也 63

個人の語りがひらく歴史

—ナラティブ/エゴ・ドキュメント/シティズンシップ …………… 槇原 茂 66

宗教生活の基本形態

—オーストラリアにおけるトーテム体系 …………… 山崎 亮 70

シェイクスピア劇の道化…………… 西野 義彰 72

## 西山砂保あてシーボルト蘭文修業証書の解読

京都大学名誉教授 松田 清

### 1 はじめに

2014年8月7日、艾儒略『職方外紀』（1628天啓2年成）の国内所在写本調査の一環として、鳥根大学附属図書館を訪れた。閲覧した『職方外紀』写本（1冊、128丁）には、「軍務図書」「御軍用方」「松江図書」という松江藩藩校修道館（1865慶應元年開設）の蔵書印が捺されていた<sup>1)</sup>。

末尾に「文政歳庚寅季□□月□□雲藩医学教授美濃館良阜景岐課」とある巻頭の漢文前書きによって、文政13年（12月10日に天保と改元）までに、松江藩医学教授山本安良（本姓館、名良阜、字景岐）が雲州荻原の西山砂保から入手したものであることが分かった。日付の一部は胡粉の塗抹が剥奪したため消えている。塗抹された元の日付は文政「十三年十二月二十二日」と判明した。

前書き冒頭によれば、砂保は「長崎人某」から入手したという。砂保は文政8年（1825）に長崎に遊学し、シーボルトやその高弟湊長庵に西洋医学を学んだ。その長崎土産がイエズス会宣教師ジウリオ・アレーニ（艾儒略）の世界地理書『職方外紀』であった。山本安良は西洋医学にも注意を怠らなかった典医荻野元凱の門人であり、儒医でありながら幅広い知的関心の持ち主であったようだ。

思わぬところで西山砂保の名に出会い、附属図書館所蔵の砂保あてシーボルト蘭文修業証書のオランダ語が摩滅してほとんど判読出来ない状態であることを思い出した。このことは早く、米田正治『鳥根県医家列伝』（1972、今井書店）および日本医師会編集『医界風土記 中国・四国篇』（1994、思文閣出版）所載の米田正治「西洋医学の開拓者 西山砂保」で報告されていた。原文の解読がこれまでになされていなければ、この際、正確な翻刻をしておこう、と思いついた。

調べてみると、卜部忠治氏が「島根大学留学中のベルギー人マユ氏の協力を得て」解説し、翻訳を発表されていた<sup>2)</sup>。しかし、原文翻刻の掲載はなかった。そこで、附属図書館情報サービスグループの小豆澤悦子氏をわずらわせ、卜部氏に翻刻発表の有無を問い合わせさせていただくとともに、提供を受けた電子画像と訳者不詳の付属文書「音訳文」をもとに、蘭文の翻刻を試みた。



その後、小豆澤氏を介して卜部氏から、マユ (Jean-Marie Mahieu) 氏の原文翻刻 (タイプ原稿) と、それを掲載した卜部氏の論文<sup>3)</sup>をいただくことが出来た。拝見したところ、原文の解説と翻訳は必ずしも正確ではなかった。現状では資料保存の関係から原本の熟覧が出来ないため、附属図書館から撮影時期が最も古いと思われるモノクロ写真 (写真参照) の提供を受け、改めて解説を行った。

## 2 蘭文修業証書の解説

最初に原文の翻字と翻訳を掲げ、ついで注釈を加えよう。

### 翻字

Den Heer Nisijama sunah[o] Leerling van den Heer Minato Tsjoon  
wordt met genoegen het getuigenis gegeven, dat dezelve zich op  
de Europesche Genees en Heelwijze met bijzonder vlijt heeft  
toegelegt — volgens waarheid

Jedo den 18<sup>de</sup> April 1826

(封蠟印)

Dr. Philip von Siebold

Oppermeester

Lid van de Keizerlijke Akademie  
der Natureonderzoeker

## 翻訳

ミナト・チョーアン氏の門人、ニシヤマ・スナホ氏は、みずから格別の熱意をもって、西洋の内科および外科の治療術を勉強したことを、真実に従い、賞賛をもって証明するものである。

エドにて 1826年4月18日

博士 フィリップ・フォン・シーボルト

出島上級医師

帝室自然研究者アカデミー会員

## 注釈

### 1) 文書の形式について

シーボルトが門人に与えた修了証書は本証書の他に、周防出身の眼科医岡泰安あて1通(1827年3月2日付、出島にて、早稲田大学図書館洋学文庫所蔵、本文6行)、徳島出身の眼科医高良齋あて2通(1829年10月30日付、出島にて、および1829年12月8日、出島にて、いずれも本文10行、長崎市シーボルト記念館保管)の3通が知られている。

3通ともDokumente zur Siebold-Ausstellung 1935 (Acta Sieboldiana VI, 1997) に写真が掲載されており、岡泰安あて証書は現在、早稲田大学古典籍総合データベース<sup>4)</sup>で精細画像が見られる。また、高良齋あて10月30日付証書はWeb上の長崎市シーボルト記念館常設展が画像を掲載している<sup>5)</sup>。シーボルトはこれら3通のいずれにもGetuigenis (証明書) のタイトルを書き入れているのに対し、本証明書はタイトルを欠いた簡略なもので、本文は4行と少ない。しかし、封蝋印 (wax seal、オランダ語でlakzegel) は他と同様、日付の下部に捺されている。

### 2) den Heer Sunah[o]の表現について

オランダ語式のローマ字では、Soenahoとすべきところを、シーボルトはSunah[o]と綴っている ([ ]は摩滅部分)。岡泰安あて証明書でも、周防をSoewooではなく、Suwooと表記している。シーボルトは西山砂保と高良齋には、de(n)Heer (氏) を使用しているが、岡泰安には、den Weledelen Heer (殿) と一段上の敬称を冠している。

### 3) 湊長安の門人西山砂保

砂保が文政8年8月長崎へ遊学したことは、本証明書の付属文書である同年「八月朔日」付の往来手形および「八月日」の「宗門證状之事」によって明かである。湊長安はシーボルト来日（文政6年7月7日、1823年8月12日）直後に、商館長コック・ブロンホフの紹介によってシーボルトの門人となった。文政8年11月に長安は長崎を立って江戸で開業し、シーボルト直伝の新療法を唱えた。

したがって、砂保が長崎で長安から西洋医学を学んだのは、長くても三ヶ月足らずであったようだ。本証明書はシーボルトの江戸滞在中（1826年4月11日～5月17日）に書かれており、その日付1826年4月18日は、和暦で文政9年3月12日に当たる。

### 4) met genoegの用語について

音訳文は原文のmet genoeg het getuigenis（賞賛をもって証明）を「メット ゲヌーゲンヘット ゲトイゲニス」のように単語の区分を誤って音訳している。met genoegは修了証書で成績評価を示すラテン語のcum laude（優等）に相当するオランダ語である。

証明書の本文を直訳すれば、「ミナト・チョーアン氏の門人、ニシヤマ・スナホ氏は、自身が格別の熱意をもって、西洋の内科および外科の治療術を勉強したことの証明が賞賛をもって与えられる、真実に従って」となるが、分かりやすい日本語に直した。

### 5) de Europesche Genees en Heelwijzeの表現について

オランダ語でEuropescheとなるべきところをEuropescheと綴ったのは、ドイツ語europäisch(e)に牽引されたためと思われる。geneeswijze（医方、内科治療方）はgeneeskunde（内科学、医学）ほど、またheelwijze（外科治療方）もheelkunde（外科学）ほど、学問的ではない。

シーボルトは岡泰安あて証明書では、zich op de europeesche Genees en Heelkunde heeft met byzondere vlyt toegelegd（ヨーロッパの内科学、外科学を格別の熱意をもって勉強した）と表記して、レベルを区別していると思われる。高良斎宛て証明書では、良斎がin alle takken van de Genees-

Heel-kruid en natuurkunde (内科学、外科学、植物学、理学のすべての分野で)「抜群の知識を獲得した」と評価している。

#### 6) シーボルトの署名に付けられた肩書きについて

Oppermeesterは、出島のオランダ商館での役職名であり、出島上級医師と訳す。岡泰安あての証明書では、Chirurgijn majoor (外科一等医官)を名乗っている。これは軍医としての階級名である。

Lid van de Keizerlijke Akademie der Natureonderzoeker (帝室自然研究者アカデミー会員)のNatureonderzoekerはNatuuronderzoekerの綴り間違い。Lid van de Keizerlijke Akademie der Natuuronderzoekerは、シーボルトが来日以前、1822年6月26日付で、神聖ローマ帝国の帝室レオポルド・カロリン自然研究者アカデミー会員Mitglied der Kaiserlich Leopoldinisch-Carolinische Akademie der Naturforscherの免状を授与されており<sup>6)</sup>、このドイツ語の肩書きを一部省略してオランダ語に置き換えたものだろう。この帝室アカデミーの所在地は1878年にハレ (Halle) に落ち着くまでは、総裁の居住地を転々としていたため、シーボルトが所在地を省略したのは不思議ではない。

なお、オランダ語 *natuuronderzoeker*、ドイツ語 *Naturforscher*をここでは原意にしたがって自然研究者と直訳したが、英語 *naturalist*、フランス語 *naturaliste*、ラテン語 *naturae curiosus*に対応する語であり、*Akademie der Natuuronderzoeker*、*Akademie der Naturforscher*はむしろ、博物学アカデミーと訳した方がよいかもしい。

### 3 岡泰安あて証明書との比較

以上、比較のためにいくつかの語句を引用してきたが、岡泰安あて証明書は西山砂保あて証明書と形式、内容ともに類似する点が多いので、早稲田大学古典籍総合データベースの精細画像をもとに、以下に全文を翻刻し、翻訳を付けよう。

翻字

Getuigenis

Den Weledelen Heere Oka Taian Geneesheer

te Hilao in de Landschap Suwoo wordt hiermede  
de Getuigenis gegeven, dat dezelve gedurende eenigen tyd  
zich op de europeesche Genees en Heelkunde heeft met by,,  
zonder vlyt toegelgt en myne te Nagasaki veziende[sic]  
Operatien bygewoond \_\_\_\_\_ Dezima den 2<sup>de</sup> Maart 1827.

D<sup>r</sup> Ph. Fr. von Siebold

Chirurgyn majoor, lid van Koninlyke[sic]

Akademie der Natuuronderzoeker te Weenen, te  
Batavia, te frankfurt, te Hanau etc.

## 翻訳

### 証明書

周防国平生の医師オカ・タイアン殿

貴殿はしばらくの期間、みずから格別の熱心さをもって

ヨーロッパの内科学、外科学を勉強し

長崎で私が監督した手術に出席したことを

ここに証明する

出島にて 1827年3月2日

博士 フィリップ・フォン・シーボルト

外科一等医官

ウィーン、バタヴィア、フランクフルト

ハーナウ等、王立博物学アカデミー会員

眼科医岡泰安は西山砂保に遅れること1年、文政9年7月25日（1826年8月28日）に故郷の周防国熊毛郡平生村を出発して、長崎のオランダ通詞吉雄権之助の塾に遊学した<sup>7)</sup>。この証明書の示すように、泰安が砂保よりも高度な西洋医学の知識を身につけただけでなく、シーボルトの外科手術にも出席していることは注目に値する。

この証明書で、シーボルトが砂保あての証明書と異なり、軍医の肩書きであるchirurgyn majoor（外科一等医官）、およびウィーン、バタヴィア、フランクフルト、ハーナウ等の博物学アカデミー会員を名乗ったことは、ヨーロッパの、とりわけフランス革命以降の軍医制度、軍陣医学の発達、18世紀

以来のヨーロッパ各地および植民地（カルカッタやバタヴィアなど）で設立された博物学アカデミー間のグローバルなネットワークが背景にある。シーボルトが多くの門人の協力を得て収集した日本の博物学標本や文物の情報は、このネットワークによって拡散した。

シーボルトによる修了証明書の授与は、高良斎のシーボルトあて蘭文書簡<sup>8)</sup>に見られるように、門人からの要請に応えたものと思われる。また、シーボルトの肩書きには、権威付けと自己顕示欲を看取することができる。

しかし、門人たちは西欧諸国の博物学アカデミーの活動、そのネットワークの意味をどの程度、把握していただろうか。高良斎あての2通の証明書は署名のみで、肩書きを欠いているが、西山砂保と岡泰安あてに書かれた2通の証明書に接して、この問いを発するのは筆者だけではないだろう。今後の課題としたい。

#### 注

- 1) 梶谷光弘「蔵書印からみた藩校の機能について—松江藩修道館文庫印譜ならびに史料目録の作成を通して—」（島根大学教育学部附属中学校『研究紀要』第38号、1996）、参照。
- 2) 卜部忠治「華岡家門人西山砂保の足跡」（島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会『華岡流医術の世界』、ワン・ライン、2008）、p.184参照。
- 3) 卜部忠治「出雲近代医学の始祖『西山砂保』考」（『大社の史話』百号、1994年8月10日刊所載）
- 4) [http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08\\_e0021/](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_e0021/)（2015.02.10閲覧）
- 5) [http://www.city.nagasaki.lg.jp/kanko/820000/828000/p009216\\_d/img/002.jpg](http://www.city.nagasaki.lg.jp/kanko/820000/828000/p009216_d/img/002.jpg)（2015.02.10閲覧）
- 6) 石山禎一・宮崎克則『シーボルト年表』（八坂書房、2014）、p.15参照。
- 7) 呉秀三『シーボルト先生：其生涯及功業』（吐鳳堂、1926）、「七〇。門人及び交友一」、p.669参照。
- 8) 『シーボルト関係書翰集 シーボルトより—シーボルトへ』（大鳥蘭三郎訳、日独文化協会編輯、昭和16年5月30日発行）所収のシーボルトあて高良斎書簡12通のうち、書簡番号25参照。

## コレクション紹介 大森文庫の価値について

—華岡流医術の真髄とその地方伝播の実態を解明する鍵—

島根大学特任教授 梶谷光弘

### 1 はじめに

安来十神ライオンズクラブは、江戸時代から明治時代にかけて、大森泰輔・加善・六四郎が医業を行った安来市大塚町本町の大森家前に顕彰碑を建立した。そして、2008年（平成20）6月22日、大森博史氏へそれを引き渡した。さらに、7月20日、「大森家三医師生誕地碑建立実行委員会」は、安来市長島田二郎氏、島根大学副学長高安克己氏、安来市医師会会長渡部和彦氏らの来賓20人を招き、地域をあげて盛大に式典を開催した<sup>1)</sup>。



写真1 大森三医師生誕地碑  
(安来市大塚町)

この石碑には、「大森泰輔・加善・六四郎は、華岡家にて麻沸散を用いた最新の医術を学び、ここで治療を行い多くの人命を救った。又、医塾『奇正軒』を開き、多くの医生も養成した」と記されている。

著者は、当日、来賓として招かれ、式典終了後、「出雲国に伝播した華岡流医術とその時代」という演題で講演を行った。

こうした動きの発端は、大森家に所蔵されていた大量の古医書や日記などにより、華岡流医術を学んだ大森泰輔ら親子3代が果たした業績が明らかになり、地元大塚町の有志が「郷土の文化人生誕地顕彰碑建立事業」を立ち上げ、尽力した結果であった。

## 2 寄贈の経緯

大森博史氏の御尊父史郎氏は、当時、島根医科大学(現島根大学)副学長だった石原國氏と鳥取大学医学部を通じての知り合いだった縁により、1979年(昭和54)、家蔵の古医書や日記類を寄贈したい旨を伝えられた。まもなくして、史料はダンボールに詰められ、トラックで大学へ持ち込まれた。

その後、2012年(平成24)まで数回にわたって寄贈が行われた。

資料1 寄贈の経緯と大森文庫の成立<sup>2)</sup>

年号	西暦	できごと
昭和54年	1979	島根医科大学副学長石原國氏と大森史郎氏とのつながりにより、大森家より史料寄贈の申し出がある。その後、史料が大学へ持ち込まれる。
昭和63年	1988	10月 史料の受け入れが整い、医学史料コレクション大森文庫が誕生する。
平成元年	1989	「大森文庫目録」を作成する。
平成2年	1990	持ち込まれた史料のうち74冊を受け入れる。
平成13年	2001	1月 大森文庫を島根医科大学附属図書館貴重図書に指定する。
平成17年	2005	掛軸2幅、書付1点を受け入れる。
平成18年	2006	残りの477冊を受け入れる。
平成19年	2007	掛軸7幅を受け入れる。
平成21年	2009	追加として54冊を受け入れる。
平成22年	2010	追加として6冊を受け入れる。
平成24年	2012	掛軸4幅を受け入れる。

こうして、現在、島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館の大森文庫には、書籍611冊、掛軸13幅、書付1点が所蔵されている。

概観すると、これらは大森泰輔・加善・六四郎らが筆写したり買ひ求めたりした、江戸時代後期から明治時代中期に至る医学・薬物、本草、ほんぞう しんがく心学・教訓、日記、漢学・儒学、宗教など、多岐にわたるものである。その特徴は、書籍611冊のうち刊本は250冊にも満たず、自筆稿本や筆写本が全体の60%余りを占めていることである。

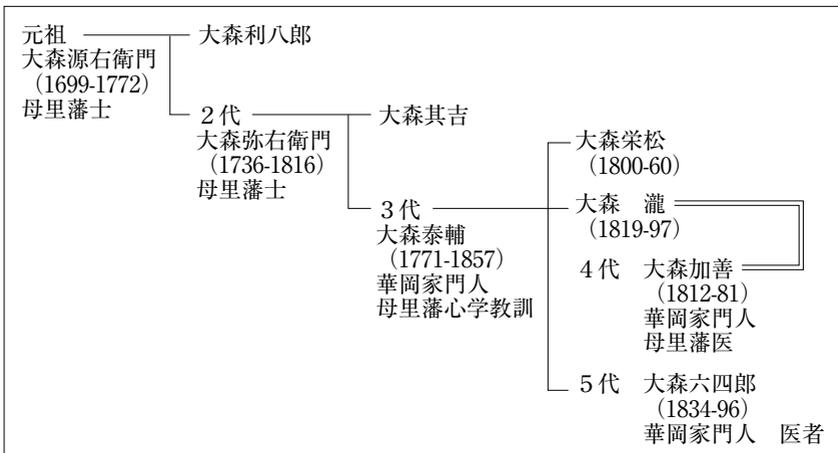
とくに、彼らが親子3代にわたって華岡家へ入門して医学修業を行ったため、華岡家医塾の実情やそこで学んだ華岡流医術の真髓が把握できる。また、彼らが修得した知識や医術を生かし、江戸時代後期から明治時代中期まで地域医療に貢献したため、麻沸湯を用いた華岡流医術の地方伝播の実態が、詳細に把握できることも注目すべき点である。

華岡青洲について長年研究され、多くの著書を出版されている弘前大学名誉教授松木明知氏は、この大森文庫を取り上げ、「華岡流医術の出雲地方への普及を知る上で貴重<sup>3)</sup>と評価した。そして、大森泰輔が「春林軒」に在塾した際に記した「南遊雑記」2冊についても、「華岡流の医術の実態、地方への普及を知る上で好個の史料」であり、「この『南遊雑記』の史料的価値は高まるもの」とし<sup>4)</sup>、今後の研究へ大きな期待を寄せた。

### 3 大森泰輔の華岡家入門

松江藩の支藩である母里藩<sup>もり</sup>において、大森家は、1800年初頭から医者として活躍し、3代泰輔、4代加善、5代六四郎が華岡家門人であった。その系図は次の通りである。

資料2 大森家の系図



### 3.1 大森泰輔について

1771年（明和8）、母里藩士の次男として生まれた大森泰輔は、小さい頃から画家を目指していたが、家庭の事情により断念し、21歳の時、母里藩へ奉公に出た。そして、江戸や大坂で学問・医学修業を行ったことをきっかけにして、28歳の時、医家を開業し、23年後の1821年（文政4）、51歳の時に「大庄屋直支配」、「名字御免」となり、医者として認められた。

幕府や藩が医者<sup>5)</sup>の身分について明確に定義しなかった江戸時代<sup>5)</sup>、この事実は、母里藩では民衆から認められて初めて「医」という職業に就くことができたことを示している。

この年、華岡青洲門人<sup>すなほ</sup>の西山砂保と出会って「瘍科瑣言<sup>ようか さげん くじゅ</sup>」を口授され、筆写した。

このできごとは彼にとって大きな刺激となり、できれば自分も華岡家で学びたいという希望をもつようになった。だが、大森家には医業を継ぐ者がおらず、また、当時の医学修業には多額の費用がかかるため、断念せざるをえなかった。

1828年（文政11）になると、大原郡の神職千原美濃<sup>ちはらみの</sup>の次男安之進（後の加善）がやってきて医学修業を行うようになった。そして、1832年（天保3）頃に



写真2 大森泰輔自画像



写真3 大森泰輔が「合水堂」で筆写した医学書  
（「陰症百問」・「青洲医談」・「膏方便覧」）

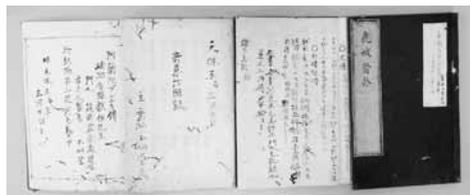


写真4 大森泰輔が「春林軒」で筆写した医学書  
（「卷木綿図彙」・「奇患治験録」・「燈下医談」・「鹿城医談」）

## 資料3 大森泰輔の年譜

年号	西暦	歳	できごと
明和8年	1771	1	藩士大森弥右衛門（高16石）の次男として誕生する。
天明4年	1784	14	画を学ぶため、安来の安田屋へ入門する。
寛政3年	1791	21	正月 父の借金が60貫文に達し、画工になることを断念する。 正月 御小人を願い出、吉村又八郎の御供で江戸へ出かける。 奉公の閑を見つけて素読、国書等の講釈、剣術などを学ぶ。
寛政6年	1794	24	5月 江戸での奉公中、尾張藩の御殿薬田中安益へ入門し、医学修業を行う。
寛政7年	1795	25	10月 葛岡多門七の御供で大坂へ上京した際、後藤栗庵、金田先生へ入門し、昼夜にわたって病家の御供をして医学修業を行う。産科は吉田意仙や賀川家で3年間修業する。
寛政10年	1798	28	帰国後、医家を開業する。
文政4年	1821	51	大庄屋直支配、名字御免となる。 西山砂保から華岡青洲の「瘍科瑣言」を口授される。
文政8年	1825	55	医師組合「医神講」の一員となる。
天保4年	1833	63	正月 医学修業のため紀州へ向けて出発する。 3月2日 大坂「合水堂」へ入門する。 6月 大坂からいったん帰国する。
天保5年	1834	64	2月19日 再び華岡家において修業するため母里を出発し、平山の「春林軒」へ行き、35人の門人と寝泊まりをともにしながら医学修業を行う。 6月 華岡青洲の肖像画を描き、青洲本人から賛をもらい、帰国する。
天保6年	1835	65	広瀬藩医から華岡流医術への批判を受ける。
天保8年	1837	67	9月25日 母里藩心学教訓となる。
天保13年	1842	72	8月5日 片江浦亀助妻の乳岩手術を執刀する。
安政4年	1857	87	4月21日 享年87歳の長寿を全うする。

は娘瀧の婿養子となり、医業を手伝うようになった。

1833年（天保4）、63歳になり、大森泰輔は医業を安之進に任せ、当時「日本無双の名医」と言われた華岡青洲の医術を学ぶため、紀州平山へ向かった。

しかし、青洲は不在であり、和歌山へも廻ってみたが、青洲は藩医として和歌山城へ登城していたため会えなかった。

そこで、泰輔は、3月2日、大坂中之島に在った「合水堂」<sup>がっすいどう</sup><sup>6)</sup>へ入門し、出雲国から15番目の門人となった。だが、すでに医者を開業して35年が経過していた泰輔にとって、「合水堂」では学ぶべき内容が乏しかったため、数ヶ月ほど滞在した後に帰国した。

翌年（1834年）、泰輔は、華岡青洲から直接医術を学ぶため、再び紀州平山に在った「春林軒」<sup>しゅんりんけん</sup>をめざして出かけた。そこには安田孝平を「塾頭」にして35人が寄宿しながら学んでおり、青洲が時々行う手術をはじめ、娘婿の華岡南洋<sup>なんよう</sup>や門人が行う診察・手術にも立ち会い、新しい医学知識や薬方、医術を修得した。

帰国する際には、自ら別の華岡青洲座像を模写し、そこへ青洲から次のような賛をもらった。

竹屋蕭然烏雀喧（竹屋蕭然烏雀喧し）  
 風光自適臥寒村（風光自適寒村に臥す）  
 唯思起死回生術（唯思う起死回生の術）  
 何望輕裘肥馬門（何ぞ望まん輕裘肥馬の門）

青洲（印）（印）

この賛は青洲の自画像にたくさん見られ、華岡家の門人としての、また医者としての心意気を示したものであった。

泰輔は、帰国すると、早速、地域医療に従事したが、広瀬藩の医者である瀧道齋から誹謗された。

しかし、彼は、「余は未熟なれども華岡の流れを用ゆ、然れば余を誹るは則ち花岡を誹る也、日本第一の花岡を誹るは其道を知らず」と、自信をもって反論した。同時に、「医術を磨くべし」と決心した。

大塚町で開業する医者でありながら、1837年（天保8）には「母里藩心学

教訓」となった泰輔は、1842年（天保13）8月5日、片江浦亀助の妻の乳岩手術を執刀した。だが、麻沸湯の効き目が弱かったせい、コロメスで切断後、「積氣上心（痛み狂って）、死を欲す、諸薬無効」という状況に陥った。

泰輔は、「春林軒」で青洲の乳岩手術を実際に見、門人が筆記した乳岩手術の治験録も筆写していたが、自ら麻沸湯を調合して執刀することは、非常に難しいことであった。

一言で「華岡流医術の地方伝播」と言うが、実際は生やさしいことではなかったのである。



写真5 大森泰輔筆  
「華岡青洲肖像画」

### 3.2 「他国雑記」からみた華岡家の実情

大森泰輔が、1833年（天保4）正月に大塚を出発し、京都で漢学・心学の学問修業、大坂中之島の「合水堂」で医学修業した際の日記が「他国雑記」1冊である。

これを見ると、華岡家の医学修業における基本的な考え方と、長男雲平<sup>うんぺい</sup>の死去により華岡家が混乱状態に陥っていた内情が判明する。

#### 3.2.1 華岡家の基本は漢蘭折衷医学

大森泰輔は、1833年（天保4）2月19日、大坂日本橋を出発し、平山街道に入ったが、そこは「至極辺鄙<sup>へんび</sup>にて、常に往来稀にして……道のりしかと定まらず、知る人なし」という寂しいものであった。平山から和歌山へも廻ったが青洲に会えなかったため、再び大坂に戻り、3月2日、大坂の商人「橋本屋治助」を「請人<sup>うけにん</sup>」（身元保証人）とし、華岡家分塾である「合水堂」へ入門した<sup>7)</sup>。

在塾中、泰輔はたくさんの書名を記録した。

それを見ると、「金瘡口訣<sup>きんそうくけつ</sup>」、「青洲医談<sup>せいしゅういだん</sup>」、「天刑秘録<sup>てんけいひろく</sup>」、「瘍科方筓<sup>ようかほうせん</sup>」、「膏

方便覧」など華岡青洲に関わる医書は当然だが、産科医の奥劣斎の「達生園方轂」、貝原益軒の「大和本草」、小野蘭山の嗣子である蕙畝の著「飲膳摘要」、中国の書物である「外科正宗」、「本草備要」、福井楓亭の「集驗良方」、「方説弁解」、さらには池田冬蔵の「解臟図譜」、杉田玄白の「解体新書」、宇田川榛斎の「(和蘭内景) 医範提綱」の解剖書などを書き留めており、華岡家では医学を幅広く学ばせようとしていたことがわかる。



写真6  
「他国雑記」内題

また、処方も「上杉某方」、「吉益流方」、「浪華林一鳥伝」、「浪華洪川氏各方」、「求古館一方」など、幅広く取り入れていた。

そうした中で、「花岡家治之極秘伝」や「解毒剤中の大黃の分量」などを細かく記録した他、二宮彦可の「正骨範」を抜き書きして「整骨麻薬」を学んだり、マンダラゲを取り扱う薬種屋、「マンダラゲの毒を去る方」、瘤切様に用いる天南星など、麻酔薬に関する情報もしっかり収集した。

このように、華岡家の基本的なスタンスは、まず漢蘭折衷医学を幅広く学ぶことだったのである。

### 3.2.2 華岡(石堂)鼎が華岡家の中心人物

「合水堂」へ入門した直後、大森泰輔は「紀州平山若旦那 御死去、大坂花岡鼎先生追善」というできごとを知った。

これは、前年(1832年)8月に亡くなった青洲の長男雲平の一周忌が行われ、青洲に代わって華岡(石堂)鼎が執り行ったという記事である。青洲の妻加恵の妹婿となった華岡鼎が、当時74歳になっていた青洲に代わって華岡家を取り仕切ったのである。当時、彼は「先生」と呼ばれ、青洲に次ぐ人物と見なされていたのである。

青洲の実弟鹿城(1827年)、妻加恵(1829年)、そして長男雲平(1832年)が相次いで亡くなり、そのうえ青洲も74歳という高齢になったが、次男修平はまだ26歳で、医者としては未熟だったため、華岡家は危機的な状況に陥っていた。

そうした中で、青洲は、鹿城、雲平ら「華岡家血族」による医塾経営を断

念し、華岡鼎に娘婿の華岡南洋（奥準平）を加え、「華岡家一族」による医塾経営を進めており、その中心人物が華岡鼎だったのである<sup>8)</sup>。

そのため、「合水堂」は、当初、青洲の実弟鹿城が1811年（文化8）に開塾し、経営していたが、鹿城が亡くなると、華岡鼎が「知事」として関わっていた。しかし、加恵が亡くなると、華岡鼎は「合水堂」だけでなく、華岡家全体の経営にも関わるようになったため、そこは華岡南洋が時々やってきて指導した。

その結果、1827年から1832年まで6年間の「合水堂」への入門者は、わずか7人ほどであった<sup>9)</sup>。

つまり、大森泰輔が「合水堂」へ入門した頃は華岡家の内部が混乱しており、「合水堂」の経営どころではなく、華岡家本塾である「春林軒」の経営・維持がやっとだったのである。

### 3.2.3 青洲の実弟治兵衛の実像

入門して1ヶ月が経過した1833年（天保4）4月27日、大森泰輔は「華岡之知事 青木覚平公死去、中之島越前御屋鋪隣、右の人は紀州青洲先生御舎弟」というできごとを知った。

この没年から考えると、「青木覚平」という人物は、「紀州妙寺町丁ノ町」に住んで木綿問屋「富田屋」を営み、主に「大坂安土町一丁目」に立地する木綿問屋「丹波屋」と取引を行っていた、青洲の実弟「華岡治兵衛（初代）」であろう<sup>10)</sup>。

ここで注目したいことは、鹿城が没した後、「合水堂」は華岡鼎が「知事」として経営していたが、華岡鼎も華岡家全体を動かす立場になり、「合水堂」の経営が手薄になったため、商人だった治兵衛が「中之島越前御屋鋪隣」に住んで「合水堂之知事」になっていたことである。

華岡家の医塾は「血族」、もしそれができなければ「一族」で維持したいという青洲の強い思いが、商人だった治兵衛を「合水堂」の「知事」に据えるという妙案を生み出していたのである。これは華岡家存亡の危機の中、苦肉の策であった。

一方、これまで大坂中之島に「合水堂」が開塾された理由は、「入門者を安定的に増やすため」、「地理的利便さ」のある大坂を選んだとされている<sup>11)</sup>が、この事実をみると、華岡家と中之島は、華岡治兵衛の商売上の関係から

早くから強いつながりがあったことが、最大の理由とも考えられる。

その後、1841年（天保12）12月26日に入門した「西山治祐」、1854年（嘉永7）6月21日に入門した「谷川周貞」、1857年（安政4）10月2日に入門した「藤岡主計」らの「更（請）人」となった「富田屋五兵衛」、「富田屋久兵衛」、「富田屋治衛」らは<sup>12)</sup>、いずれも「富田屋」の華岡治兵衛の一族と考えられる。

こうした事実から、治兵衛が「華岡之知事」になった時期は、華岡鼎が青洲の片腕となって華岡家全体を指揮・運営するようになり、「合水堂」を不在にするようになってからであった。これを契機に治兵衛一族である「富田屋」が華岡家の医塾経営に関わるようになったものと推測される。

このように、「他国雑記」を解説すると、「合水堂」の経営が混乱し、窮地に陥っていたことが判明するのである。そして、まもなく青洲本人の死去（1835年）によって、華岡家は最大の危機を迎えるのである。

### 3.3 「南遊雑記」からみた華岡流医術の真髓

大森泰輔は、大坂中之島の「合水堂」で修業した後、一旦帰国し、翌年（1834年）2月19日、今度は平山の「春林軒」へ入門し、約3ヶ月半、ここで学んだ。この時の在塾日記が「南遊雑記天」、「南遊雑記地」の2冊である。

「他国雑記」の目次が15項目だったのに比べ、「南遊雑記天」は45項目、「南遊雑記地」は41項目に及び、わずか3ヶ月半ほどの在塾だったが、泰輔は華岡流医術の真髓を学び、充実した医学修業だったことがうかがえる。

華岡青洲は高齢だったが、生死に関わる乳岩をはじめ、<sup>だっ</sup>脱疽、<sup>えい</sup>会陰打撲、



写真7 「南遊雑記天」・「南遊雑記地」目次

翻花瘡ほんかそうなどの手術を執刀し、完成の域に達していた医術を門人へ公開した。

泰輔は、華岡流医術の真髄である乳岩手術に関して、門人から教わった情報も細かく記録した。

### 3.3.1 乳岩手術

#### (1) 手術の執刀数

「春林軒」にやってきて1ヶ月ほどした頃、泰輔は、「天保四巳年迄に先生（の）家、凡（そ）乳岩の療治二百五十余人と言（う）、尤（も）死する者数を知らず」という話を聞いた。これは、「乳巖姓名録」に記載された1831年（天保2）までの150人<sup>13)</sup>を大きく上回っていた。この100人にも及ぶ誤差は、「乳巖姓名録」にはすべての症例が記載されていないことや、術後に死亡した患者が数多くいたことなどによるものであろう。

また、塾頭であった「美濃安田孝平子曰（く）、余が父は乳岩を十三人療す、其内三人は十日、三十日の中ちに死（に）、其余（り）は四、五年の午ちに死（に）、其内四、五人は今も存命せり」という話も聞き、華岡家の門人が全国各地で乳岩手術を執刀し、成功を収めていたことを知った。

#### (2) 「問診」のポイント

泰輔は、「問診」の際、「乳岩は兎角肩背へ（の）こるを目当」とし、痛みを生じている場合には、「乳岩は二十日、三十日には痛み出さず、少くても半年、一年或は二年、三年もしてから痛（み）を發する」と聞き、乳岩がかなり進行していることを知っていた。

#### (3) 「切診（触診）」のポイント

乳岩と乳核の見分け方は難しく、前者は、「手にてよくよく押（し）て見るに、何となく手ざわり角と立ちて覚ゆ、而（して）美しく丸みなき也、又堅さも甚（だ）し、消長は岩にもある」とし、後者は、「岩の如く角立たず、美しく丸みありて岩の如く堅からず」とし、泰輔は乳房を手で押してみることによって、両者を区別した。

#### (4) 手術の判断

診断した後、手術を実施するか否かについて、「乳岩自潰する迄待てば是非死する也、自潰後十日許（り）にて多（く）死す、故に自潰を待たず切断すれば百人に五十人は治す」、また「乳岩は脇下こるものは不治、又小なり

と雖（も）骨に付き深きものも不治」と教わった。

これは、腋窩<sup>えきか</sup>リンパ節への転移や胸骨<sup>きょうこつ</sup>に浸潤した場合は予後不良であるとする、現在と同じ診断であった。

#### (5) 手術の承諾書

「乳岩等難症を療するには勿論、証文を取（り）て切断すべき也」と書き留め、事前に必ずインフォームド・コンセント（informed consent）により証文を書かせ、術後のトラブルを回避していたことがわかる。

つまり、乳岩手術のような生死に関わる手術の実施は、家族等からの苦情・訴訟が生じていたことを示すもので、医療訴訟の始まりでもあったのである。

#### (6) 乳岩手術

1834年（天保5）3月下旬になり、泰輔は乳岩手術について、次のように記述している。

勢州の一婦年三十余、乳岩にて老先生是を切断す、其岩堅まらず、数々々して之（を）取（り）、下に付（く）処を切取（り）し也、血の出ること瀧の如（し）、止血の術にても止まらず、其俣縫ひ巻木綿し、一夜置（い）て血止（ま）る、全快す。

この「老先生」とは75歳の青洲である。

ところが、「乳巖姓名録」を見ると、1834年中に乳岩手術は一度も行われていない<sup>14)</sup>。

この記述は、「天保四年三月廿五日、勢州津在田中、本光寺 内室」、または「同年（天保4）四月三日、同国久井 善八 妻（三十九歳）」とも考えられるが、この2人の治験録は、別府加膳が「華家治験」としてまとめ、「南遊雑記地」にも記載されている。これを見ると、前者は「年四十有余」であり、両人とも「数旬を経て……全治」しており、泰輔が記載した症例とは状況が異なっている。

したがって、青洲は亡くなる1年前にも乳岩手術を執刀したが、その症例は「乳巖姓名録」には記載されなかったのである。

#### (7) 術後

泰輔は、術後の処置について、「乳岩を切断して当座に死せずして後に死

するは、多くは破傷風となりし也、此症破傷風となりては助かるものなし」とし、感染症を「破傷風」と称し、恐れていた。

また、「乳岩之薬」である麻沸湯を用いて「麻薬をかけ」、「二日も醒めず、其俣死するものあり、故によりより病人を（の）虚実を見ること肝要なり、麻薬後は三黄湯にてよく醒むる也、必ず用（いる）べし」とし、麻沸湯の効き過ぎにも注意を払っていた。

### 3.3.2 乳岩・外科手術を支えた華岡家の薬方

華岡流医術の真髄は、乳岩手術の際に使用する麻沸湯や手技はもちろんだが、それを支えたのは華岡家のきめ細かな診断とそれに対応した薬方であった。

華岡青洲は、麻沸湯を投与する前には「前三診」、投与後には「後三診」と言われる診察基準を設け<sup>15)</sup>、そこで見られた症状には、薬方によりきめ細かに対応していた。



写真8 「金瘡口訣」



写真9 「華岡家天保己配劑記之写」

大森泰輔らの門人は、春夏秋冬に行う「摘薬」(薬草採集)や、植物のスケッチを日課としながら、「金瘡口訣」、「春林軒薬加減之方」、「花岡家天保己配劑記」などを筆写し、処方への細かな違いを知った。そして、青洲らの臨床現場に立ち会うことにより診察眼を養い、薬方の実際を理解した。

これらを見ると、華岡家の薬方は、古代の『出雲国風土記』に使用されていた植物(和方)、中国の本草学から学んだ植物(漢方)、そしてカタカナで書かれた「蘭薬」・「蘭油」(蘭方)を組み合わせ、患者の微妙な症状に対応していたのである。

### 3.3.3 シーボルトと華岡家の乳岩手術

1834年（天保5）5月上旬、大森泰輔は、在塾した筑前太宰府出身の小嶋玄斎から次のような話を聞いた。

ヲルイス国のシイボルトは久々入牢せしが御免ありて三年以前帰国す。ヲルイス国は乱世にて七ヶ年が間金瘡の療治をせし故、金瘡の治術に妙を得たるもの也と。又日本にて華岡家の乳岩の治術を受（け）、長崎にて是を療じたれども死したり。

1823年（文政6）に來日したオランダ商館医シーボルト（Ph.Fr.Von Siebold）は、翌年（1824年）から通詞の家で診療を開始し、この年から長崎郊外に「鳴滝塾」を開き、門人へ実地診療や臨床講義を行い、わが国の医学に大きな影響を及ぼした人物である。だが、帰国する際、シーボルト事件が起り、高橋景保ら多くの人物が処分されたことでもよく知られている。

このシーボルトが華岡家の乳岩手術を教わり、長崎で執刀したが、失敗したと言うのである。

シーボルトに乳岩手術を教えた人物として、大森泰輔が教えを受けた西山砂保が考えられる。

西山砂保は、1811年（文化8）に「春林軒」に入門した。帰国後、麻沸散を用いて乳岩や外科手術を行っていたが、シーボルトが來日したことを聞くと、1825年（文政8）、長崎の湊長安<sup>みなとちやうあん</sup>を訪ね、翌年（1826年）4月18日、シーボルトから修了証書を授与された人物である。

日本人の医者に尊敬されたオランダ医のシーボルトが華岡流医術に関心をもち、その医術を習得しようとし、実際に乳岩手術を行っていたことは、注目すべきことである。そして、彼が失敗したことから、華岡家の乳岩手術がいかに難しく、その修得が容易なことではなかったことを示している。

## 4 華岡家塾頭大森加善の医術と地域での貢献

### 4.1 「合水堂」の塾頭として活躍

大森加善（幼名安之進）は、1812年（文化9）、大原郡清田村の神官千原美濃の次男として生まれ、17歳の時から大森泰輔に入門して医学を学び、21

歳の頃、泰輔の娘瀧の婿養子となった。

加善は、義父の帰国と入れ替わるように、1835年（天保6）正月29日、大坂の「合水堂」へ入門した。彼もまた「請人」（身元引受人）は義父同様「橋

#### 資料4 大森加善の年譜

年号	西暦	歳	できごと
文化9年	1812	1	2月25日 大原郡清田村の神官千原美濃の次男として誕生する。
文政11年	1828	17	大森泰輔のところで医学修業を行う。
天保3年	1832	21	この頃、大森瀧の婿養子となる。
天保6年	1835	24	正月29日 大坂「合水堂」へ入門する。 10月2日 華岡青洲が享年76歳で亡くなる。
天保7年	1836	25	3月3日 大坂「合水堂」の「張替役」となる。 5月1日 華岡鼎から大坂「合水堂」の「塾頭」を命ぜられる。
天保9年	1838	27	閏4月2日 大坂から帰国する。 9月 大坂の吉益掃部へ入門する。
天保10年	1839	28	6月 大坂での修業を終えて帰国し、大塚村で開業する。
天保11年	1840	29	12月24日 町医上座、御従士目付御支配となる。
弘化2年	1845	34	7月5日 御医師並寺社奉行支配となる。
嘉永元年	1848	37	4月5日 御従士上席御医師方同席、御郡代支配となる。
嘉永6年	1853	42	正月28日 医学塾「奇正軒」に能義郡赤江村野内春英が入門する。
安政7年	1860	49	御医師筆頭となる。
文久3年	1863	52	3月11日 島根郡卯井村伝助の娘の陰瘤手術を行う。 3月21日 隠州島後周吉郡矢尾村又四郎の妻の乳岩手術を行う。
慶応元年	1865	54	4月7日 藩主の御帰府に際し、御供、格式士列格勤番を命ぜられる。 この年、「奇正軒塾則」を定める。
明治2年	1869	58	3月 医師頭取となる。
明治8年	1875	64	隠居する。
明治14年	1881	70	11月13日 大塚村関田山で没する。元広瀬藩儒の山村良行が墓碑を記す。

本屋治助」であり<sup>16)</sup>、出雲国から16番目の門人となった。

同年10月、青洲が76歳で亡くなり、華岡家は最大の危機を迎えたが、加善は、1836年（天保7）3月に「張替役」、5月には「塾頭」に任命された。当時、華岡家全体を運営していた華岡（石堂）鼎は、「治療宜敷（き）様、一人頼（み）入（り）候」と書き、彼の医術に強い期待を込めたのである。

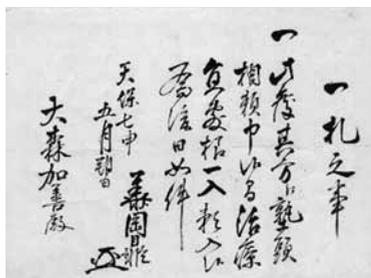


写真10 大森加善への塾頭任命書

「合水堂」への入門者は、華岡鹿城の没後（1827年）低迷していたが、1836年には10人となり、医塾経営が次第に安定してきた<sup>17)</sup>。

彼は塾頭として「乳岩再発」、「両欠唇<sup>けっしん</sup>」など多くの手術を執刀し、そこで行った20症例を「奇患並大患<sup>きかんならびにたいかんず</sup>」として記録した。

これらはまさに華岡流医術の伝統を受け継ぐものであった。

こうして、外科手術に優れていた大森加善は、華岡家の分塾「合水堂」の塾頭、その後は母里藩の御医師筆頭にまで昇進し、活躍したのである。

## 4.2 華岡流医術の真髄「麻沸湯の威力」とその地方伝播

大森加善は、1845年（弘化2）、母里藩医に抜擢され、以後、明治を迎えるまでその役職にあった。

その間、自宅で医学塾「奇正軒<sup>きせいけん</sup>」を開き、1853年（嘉永6）に最初の門人を受け入れ、1875年（明治8）に隠居した後は甥の六四郎（5代）に任せた。そして、「奇正軒」は、1898年（明治31）に最後の門人を受け入れ、約40年間にわたって華岡流医術を伝授した。

一方、加善は、1863年（文久3）3月、17歳の時に梅毒を煩い、陰瘤<sup>いんりゅう</sup>（陰部にできた肉瘤）が生じていた雲州島根郡卯井村の25歳のお多美を診察した。その時、彼は次のように述べた。

余、之れを見て言（つ）て曰く、麻沸湯を用（い）て截断せば治すべしと、患婦悦（び）て治を請ふ。

そして、3月11日朝、加善は麻沸湯を用いて執刀した。脈管を7ヶ所切断したため、出血がおびただしかったが、右の創口を12針、左の創口を9針ほど縫い合わせ、完治させた。

さらに、その10日後の3月21日には、乳岩患者を執刀した。

患者は、隠州島後周吉郡西郷矢尾村から、農夫又四郎とともにやってきた妻お冬、年齢は50歳であった。5年前から自覚症状があり、今年の正月からは疼くような痛みがあり、歩くと脈拍が早くなるという状態であった。診察した医者は、皆「不治の病」と診断した。

初めてお冬を診察した3月13日、加善は、次のように説明した。

余、一診して曰く、麻沸湯を用(い)て截断せば治すべしと。患婦又た之れを怖れて曰く、若し麻沸湯を用(い)て後、<sup>めいげん</sup>瞑眩醒(め)ず、遂に黄泉の客とならば則ち之れを如何せんや。余曰く、死生皆な天の命ずる所にして、而して医は司命の官にあらず、只々手術を施し、薬名を投じ、以て其の病苦を助くるのみ、しかるといえども、余、未だ嘗て麻沸湯を用ひて以て人を誤らず、汝ぢ、之れを怪しむことなかれ。又四郎、<sup>こうとう</sup>叩頭して曰く、手を束ねて而して死を待つよりは、<sup>むし</sup>寧ろ人力を尽くして以て天命を待たん、請ふ、君、治を辞すること勿れと。

加善は、又四郎と妻お冬へ丁寧にインフォームド・コンセントを行い、手術に対する同意を得ている。

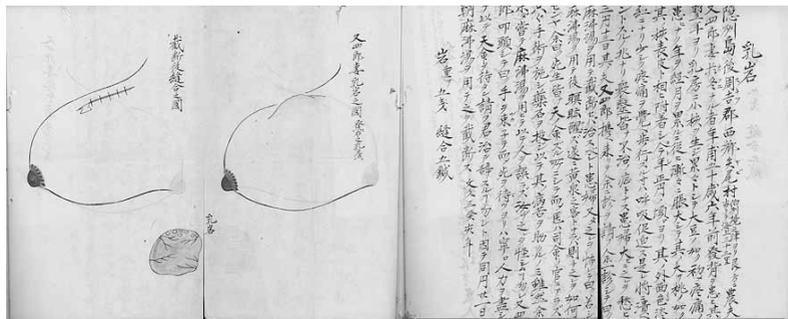


写真11 大森加善が行った「乳岩」手術（「奇患並大患因」）

その中で、加善は、これまで麻沸湯を用いた手術での失敗が一度もないことを説明した。この自信は、麻沸湯の威力とそれに関わる安全性への配慮、手術前後の薬方など、華岡流医術への絶対的な信頼と手応えからくるものであった。

その後、加善は前三診を行った後、3月21日、麻沸湯を用いて乳岩を執刀し、完治させた。

こうして、麻沸湯を用いて手術をすれば治癒することが証明され、人々の華岡流医術への信頼は一層高まっていった。同時に、病人が死を待つ時代は終わりを告げ、医者にかかれれば治癒できるという意識が芽生えたのである。

## 5 おわりに

華岡青洲が初めて乳岩手術に成功したのは1804年（文化元）のことであり、出雲地方において、死を待つしかなかった病が、麻沸湯を用いた華岡流の医術により完治することが証明されたのは1863年（文久3）のことであった。この約60年の年月をかけて、華岡流医術は出雲地方へ定着したのである。

そして、民衆の中に芽生えた医療への信頼は、その後の近代医学を受け入れる素地になっていったのである。

## 謝辞

大森文庫に関わる史料の閲覧について、島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館の皆様にはたいへん便宜を図っていただきました。紙面を借りてお礼を申し上げます。

## 注

大森文庫の史料は所蔵を明記しない。また、これまでに公表した次の拙稿については、文献として明記しない。

- ・拙稿「母里藩医学史 華岡家門人大森家の史料目録—3代目不明堂三楽・4代目三益・5代目六郎の関係史料—」、『山陰史談』30号、2000年。
- ・拙稿「母里藩の医者大森不明堂三楽の生涯—出雲国への華岡流医術の伝播—」、『山陰史談』31号、2003年。
- ・リーフレット「島根にもたらされた華岡流医術—大森文庫からみた江戸後期の診療—」、島根大学附属図書館医学分館、2005年。
- ・リーフレット「在村医の画人的素養—大森不明堂三楽が描いた掛軸とスケッチ—」、島根大学附属図書館医学分館、2006年。

- ・パンフレット「出雲国に伝播した華岡流医術とその時代—大森泰輔・加善の医術と文化的素養—」、島根大学附属図書館・島根県立図書館・松江市立図書館主催企画展示、島根県立図書館、2008年。
- ・島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編『華岡流医術の世界—華岡青洲とその門人たちの軌跡—』、ワン・ライン、2008年。

## 文献

- (1) 「大塚交流センターだより」No.24、2008年11月。  
拙稿「母里藩の医家・大森家」、『図説 松江・安来の歴史』p.154-5、郷土出版社、2012年。
- (2) 島根大学学術情報機構附属図書館医学図書館所蔵文書。
- (3) 松木明知『華岡青洲研究の新展開』p.16、真興交易医書出版部、2013年。
- (4) 文献 (3) p.23。
- (5) 海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学—』p.5、吉川弘文館、2014年。
- (6) 「ごうすいどう」と読まれることが多いが、華岡鹿城末裔の方々は「がっすいどう」と読まれる。
- (7) 入門年次順門人録「四海門□□」華岡青洲末裔所蔵。
- (8) (9) 拙稿「華岡青洲門人石堂鼎と妹背家—華岡家を支え続けた功労者—」p.43-46、『日本医史学雑誌』60 (1)、2014年。
- (10) ①呉秀三『華岡青洲先生及其外科』p.105、大空社、1994年。  
②高橋克伸「春林軒『門人録』について」p.470、『国立歴史民俗博物館研究報告』第116集、2004年。  
③松木明知「華岡青洲の系譜的研究」によると、治兵衛は、1833年（天保4）4月7日に没したとされている。（松木明知『華岡青洲の新研究』p.73、岩波出版サービスセンター、2002年。）
- (11) 文献 (10) ②p.473。
- (12) 文献 (7)。
- (13) 「乳巖治験録」に書かれている最初の3人は手術を受けていない。（松木明知『日本における麻酔科学の受容と発展』p.77、真興交易医書出版部、2011年。）
- (14) 松木明知『華岡青洲と「乳巖治験録」』p.106-46、岩波出版サービスセンター、2004年。
- (15) 医聖華岡青洲展実行委員会編『ロマンと創造への曼荼羅華 医聖華岡青洲展』p.17、医聖華岡青洲展実行委員会、1992年。
- (16) 文献 (7)。
- (17) 文献 (8) p.43。

# 大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」

—企画展「戦争と平和を考える2014」より—

島根大学学術情報機構附属図書館

情報サービスグループ 小林 奈緒子

## はじめに

近年、大学図書館における企画展の開催が積極的に行われている<sup>1)</sup>。大学図書館における展示の重要性やその意義について、例えば米澤誠は、①展示観覧者・利用者に向けた啓蒙活動としての展示、②図書館・大学の広報活動としての展示、③図書館職員の人材育成活動としての展示と分類し、提示している<sup>2)</sup>。この米澤の分類について、篠塚富士男は「啓蒙・公開活動としてのみ考えがちな従来の考え方・発想からの転換が示されているが、これによって、図書館展示には視点の違いによって多様な意義を見いだせることが明らかとなった」と指摘している<sup>3)</sup>。また篠塚は、米澤の分類を「展示のねらい」と表現し直し、①啓蒙活動の意義として「資料への興味・知識欲の向上・図書館資料の活用」、②広報活動の意義として「社会へのアピール・地域貢献」、③人材育成活動の意義として「企画力・専門的知識・活性化」があると述べている。

島根大学においても、大学憲章の理念を表す言葉として「人とともに、地域とともに」と定めている<sup>4)</sup>ように、積極的に教育・研究成果を地域に還元しないしは公開しており、附属図書館もその例外ではない。所蔵している資料や学修環境の提供はもちろんだが、松江の近代美術史家であり事業家であった桑原羊次郎のコレクションをはじめ、大乘仏教の論書である大智度論や堀尾期松江城下町絵図、小泉八雲関係資料といった貴重資料を、企画展での公開や、デジタル資料としてデジタルアーカイブにて公開している。今回、本稿では2014年夏に開催された企画展「戦争と平和を考える2014」の報告を軸としながら、「地域」と「戦争・平和」をつなぐ大学図書館の役割について考えてみたい。

## 1 企画展の概要

### 1.1 図書館界での「戦争と平和」

今回の企画展では「戦争と平和」をテーマとしたが、そもそも、図書館界ではこのテーマに関して、これまでどのように議論されてきたのだろうか。考察の手掛かりとして、日本図書館協会が発行している『図書館雑誌』の特集を見てみた。『図書館雑誌』を対象としたのは、同誌がその時々日本の図書館界を俯瞰できる代表的な雑誌の一つであり、他の雑誌と比較しても同テーマに関して多く特集を組んでいたためである。

表1のように、『図書館雑誌』では例年8月号において「戦争と平和」の特集を組んでいた時期があった。1980年代、90年代である。90年代では、90、91年については特集から外れた<sup>5)</sup>ものの、その後92年～99年までは同様のテーマで特集を組んでいた。2000年以降は、特集として組まれることはないが、時折関連する内容の記事や論文を紹介していた。

1980年代に図書館界で戦争と平和についての議論が盛り上がった背景として、1984年が一つの節目の年であったためと考えられる。図書館界では、まず1954年に、全国図書館大会において「原子兵器禁止に関する各国図書館界への訴え」が採択された<sup>6)</sup>。少し長いが、以下引用する。

「今や人類はあらゆる困難と戦って原子兵器の禁止を実現しなければならない時期に到達していると考え。我々日本の図書館人は……世界各国の人民に向って原子兵器が禁止されるべきであることを訴えたい。……（中略）我々は我々と同じ仕事にたずさわる世界各国の図書館人に対してこれを訴える事が人類の平和にして光栄有る生存に直接寄与すべき我々の仕事の性質からいって、当然の義務と考えるものである。」

この訴えより、村上美代治は「日本の置かれた状況、あるいは職業倫理から世界のリーダーシップの役割を果たすべきであることの表明がされており、戦後の図書館史において大変重みのある決議」であると指摘している<sup>7)</sup>。この1954年は、マグロ漁船第五福竜丸のビキニ被爆が起きた年であり、全国的に原水爆禁止の世論が盛り上がった年である。それから30年目にあたる1984年を目前に控えた年、図書館員有志により幾度か会合がもたれた後、1985年に先述した「原子兵器禁止に関する各国図書館界への訴え」の理念を

受け継いだ、「図書館反核平和の会（正式名：核兵器をなくし平和を求める図書館関係者の会）」が誕生した。同会の会則では、図書館が発展するには、核の存在しない平和な社会の構築が不可欠との認識を鮮明に打ち出している<sup>8)</sup>。

また、村上はユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という点に関して、図書館の果たすべき役割が「非常に重大」であることを指摘しており、「資料提供という活動を通して、利用者に情報を提供する行為に図書館の使命があり、図書館員はその要」でなければならないと述べている<sup>9)</sup>。この村上の指摘は現在にも通じるものであり、その理念は館種を超えて共通する部分であろう。村上は他にも、「図書館員の立場で核兵器の廃絶と世界恒久平和に向けた運動の展開こそ、同会の存立基盤である」と同会設立の趣旨を説明している<sup>10)</sup>。ここでは紙面の都合上、同会の活動や図書館史における同会の歴史的意義といった点についての具体的な検討はしないが、その後、同会は2004年9月に『「図書館九条の会」へ発展的な合流を遂げ<sup>11)</sup>』ている。

このように、図書館界でも戦争と平和に関する議論の盛り上がりは80年代～90年代に見られたことがわかったが、2000年以降になると、この議論はほとんどみられなくなる。『図書館雑誌』でも特集として組まれることはなくなり、時折関連した記事が掲載されている程度であった。

一方、大学図書館においては、公共図書館同様、図書の展示をはじめ様々な企画展が行われているが、大学図書館における企画展の取り組みに関する事例紹介の中で、特に「戦争と平和」に関する企画展についての報告は、管見の限り事例として確認できなかった。しかし、直接的には関係しないが、例えば広島大学の尾崎文代らの北欧平和学図書館調査報告において、興味深い指摘があった。

尾崎らは平成16年度広島大学後援会国際交流助成事業として、ストックホルム国際平和研究所、オスロ国際平和研究所など北欧3カ国の平和学研究所図書室・大学図書館等を訪問した際の調査研究を報告している。その中で出会ったライブラリアンとのやりとりを通して、「平和学を学ぶ学生・研究者を支援するために図書館員のまずなすべきことは、今回出会った平和学のサブジェクトライブラリアンの言葉どおり、『世界で何が起きているのかに敏

表1 『図書館雑誌』8月特集一覧

1946	なし	1981	民衆史発掘・記録の運動と図書館
1947	なし	1982	8月によせて・図書館のもう一つの役割を考える
1948	なし	1983	アジアを視る目
1949	なし	1984	反核・平和の運動を考える
1950	なし	1985	戦後40年の歩みのなかから―「21世紀への図書館」のために
1951	なし	1986	国際平和年に寄せて―図書館と平和問題とのかかわり方は?
1952	なし	1987	国家秘密法と図書館の自由
1953	なし	1988	図書館から問う戦争と平和 1988
1954	第7回全国図書館大会議事録・『原子兵器禁止に関する訴え』(7月号)	1989	図書館から問う戦争と平和 1989
1955	なし	1990	図書館の異文化サービスを考える
1956	オートメーション特集	1991	異文化サービスの実際
1957	なし	1992	図書館は戦争にどうかかわったか
1958	小図書館(公共)の問題	1993	図書館から「戦争・平和」をみる1993
1959	特集なし(図書館大会議事録・日本図書館協会総会議事録)	1994	図書館と戦争関係資料
1960	特集なし(図書館大会議事録・日本図書館協会総会議事録)	1995	図書館の戦後50年を問いなおす
1961	特集なし(日本図書館協会総会議事録)	1996	戦争関係資料へのアクセス
1962	なし	1997	日本国憲法50年と図書館
1963	なし	1998	図書館と子ども―未来へのメッセージ
1964	なし	1999	歴史を風化させない試みを考える―戦争資料と図書館
1965	通号500号記念特集・敗戦前後の図書館	2000	予約サービスと図書館間協力の現在
1966	図書館シリーズ・戦後21年―図書館員活動の総括 座談会・戦後21年をこう受け止める	2001	図書館の話題a la carte
1967	最近の展望 公共図書館をとりまく状況の諸相	2002	市町村合併と図書館
1968	公立図書館の司書職制度	2003	図書館の話題a la carte
1969	図書館と機械化	2004	大学図書館2004
1970	なし	2005	個人情報保護と図書館
1971	なし	2006	変わり目にある図書館
1972	児童図書館	2007	図書館評価を問いなおす
1973	なし	2008	全国図書館大会への招待
1974	図書館サービスとしての複写	2009	YAサービス新世紀
1975	なし	2010	全国図書館大会への招待
1976	なし	2011	東日本大震災と図書館
1977	アジアの図書館	2012	観光ポータルとしての図書館
1978	なし	2013	「中小レポート」50年
1979	NDC50年	2014	図書館の話題a la carte
1980	戦争と図書館資料		

感になること』であろう」ことを確信している。そして「それは、世界で起きていることを知り、問題があるならその原因はどこにあるのか、望ましい状態とは何か、その状態とするためには何をすべきかを考察することに通じる姿勢、すなわち『平和学への第一歩』であろう」と述べている<sup>12)</sup>。この尾崎の「平和学」に接する図書館員の意識のあり方については、後述する企画展で得た筆者の感想と共通していると思われる。

## 1.2 企画展開催の経緯と開催趣旨

戦後70年を目前に控えた2014年の春、当館に「山陰中国帰還者連絡会資料」（以後「山陰中帰連資料」）を寄贈していただいた難波靖直氏が他界された。難波氏は、自分たちの活動の記録を、広く地域の人々に見てもらいたい、そして大学図書館に寄贈することで教育・研究に供してもらいたい、と強く願っていた。

中国帰還者連絡会（略称・中帰連）とは、戦後旧ソ連に抑留されたのち戦犯として中国へ引き渡され、撫順・太原戦犯管理所に収容された日本軍兵士が、罪を許されて日本に帰国した後、自分たちの戦争体験を加害の視点で伝えていくこと、そして日中の友好を築いていくことを誓って1957年に結成された組織である。当館に所蔵している資料は、中帰連山陰支部（後に山陰中国帰還者連絡会へ改称）の活動記録およびその関係資料である。同資料は、長年事務局長を務めていた難波氏が保管されていた物であり、2013年当館に収蔵した。資料からは、帰国後会員たちがどのような状況で互いに励まし合い、助け合って戦後を生き抜いてきたのか、当時の社会状況や地域社会の様相がよく分かる。また、地道な平和活動を続けてきた活動記録は創刊号から現在まで欠けることなく保存されており、これらを紐解くことで、戦後山陰の平和運動の一端がみてとれる。何より、これらの資料は地域の人々にとって、同郷のごく「普通の人々」が、戦争によって兵士となったことで人生を大きく変えられたことや、その後の彼らの歩んだ人生を知り、彼らを地域社会がどう受け止めてきたのか、詳細に教えてくれる。地域にとって歴史の重みを実感できる、貴重な史料といえるだろう。だからこそ難波氏は、出来るだけ多くの地域の人々にこの史料を見てもらいたいと願っていたのである。

このような資料の収蔵に加え、企画展を開催するに必要な環境が整ったこ

とも、開催のきっかけの一つである。同資料が寄贈された翌年（2012年）に本館の改修が行われ、新たに「展示室」が設けられた。また、2013年春のリニューアル後、ようやく業務も落ち着いてきたことから企画案を構想し、2014年夏に展示を開催した。今回の企画展では、近代以降の松江と戦争との関わりに焦点を充て、この中で山陰中帰連資料の一部を解説・紹介した。地域の歴史を振り返りつつ、展示から「戦争とは何か、平和とは何か」を考える機会の一つとなることを企図したものである<sup>13)</sup>。この点については、後ほど詳しく述べることとする。

### 1.3 準備と構想

まず、企画展を計画するに当たり、資料について知ることから始めた。資料がどのような物で、どのような事が書かれているのか、自分が分かっているなければ展示は出来ない。そこで、資料の寄贈申し出があった際に、核となる資料については個人的に撮影を行う一方、資料について寄贈者からそれぞれ詳細な解説をいただいた。撮影に関しては、資料保存の観点と、個人的に資料を読み込み、分析を行うという二つの理由があった。

その後資料を分析し、史料紹介として一つの研究ノートにまとめ、発表した。投稿先は学内の法文学部山陰研究センター紀要『山陰研究』を選んだ。資料が地元・山陰地域のものであることから、将来的に法文学部の教員や関係者が資料を有効活用してくれることを期待してのことである。また、学内で発行された紀要のほとんどは、鳥根大学学術情報リポジトリSWAN<sup>14)</sup>で広く公開されるため、一般の人でも比較的容易に論文を入手することが出来、資料の利用につながると考えたからであった。詳しくは拙稿をご覧ください<sup>15)</sup>。

このように資料を全体的に俯瞰・把握した後、実際にどの資料を使ってどのような展示にするのか、その構想を考えた。企画展を開催する場合、附属図書館では各担当から1～2名程度が集まって組織された、広報チームがその企画・運営を担当している。そのため、まずは自分の大まかな企画案のスケッチを2013年の冬に提出し、2014年度に入ってからスケジュール調整をしながら日程を決め、正式な企画案としてまとめた。

#### 1.4 展示の工夫

展示にあたり留意・工夫した点を、以下①時期、②広報、③内容、④方法に分けて述べたい。

まず①時期については、当初より夏の開催を予定していた。このテーマに関しては、毎年夏に各メディアも特集を組む事が多く、人々が平和を意識する事の多い時期と考えたからだ。しかし、企画展に一番来てほしい学生は、8月上旬で前期試験も終了し、図書館にも来なくなる。そのため、7月1日から夏季休業が終了するまでの期間、開催することとした。

次に、②広報については、従来の広報ツールである図書館HPをはじめ、ツイッター、ニュースレターLiMe(ライム)、デジタルサイネージ等を使って周知した(写真1)。また、報道機関宛に、大学の総務部・広報を通じて企画展の案内を配布した。また、知り合いの地元紙の新聞記者には、別途案内メールも送った。結果、地元紙をはじめ3社が取材に来場し、記事として掲載された。これらを読んだ地域の人から企画展の問い合わせもいくつかあり、また実際に足を運んで下さった方もいた。

③内容については、開催の趣旨とも関連することだが、この点が一番苦慮した点である。最初の構想では、戦争の歴史について解説し、日中戦争、アジア太平洋戦争の流れで山陰中帰連の資料を展示する、という事を考えていたが、それではあまりにも大まかすぎて、見る側は面白くないのではないかと思いついた。開催するにあたり、一番展示を見てほしいのは若い人々、つまり学生である。しかしながら、戦争と平和をテーマにした展示に来場してくる人々は、おそらく一般の地域の年配の方が多数ではないか、と考えた。というのも、当館ではもともと地域の人々に図書館を開放しており、特に公開授業等を聴講に来る地域の人々が、授業の合間によく図書館を利用していた。2014年4月から始まった市民パスポート会員制度により、一般の人の比率は更に増したと実感している。そのため、学生が見ても、地域の方が見てもなじみやすい内容でないと、せっかくの展示資料も活かしきれないのでは



写真1 企画展ポスター

ないかと考えた。そこで、近代松江という枠組でストーリーを展開させることにし、より身近な地域の歴史の中の資料として、山陰中帰連資料を紹介することにした。こうすることで、来場者と資料の距離がより近くなることを企図した。

また、展示パネルを作製するに際し、一つのコラムを設け、解説を充実させた。コラムでは、「松江と歩兵第六十三連隊」と題し、当時の写真と、現在も残る同連隊関連史跡の写真を、地図上で解説した(写真2)。近代松江では、当時の松江市長福岡世徳の振興策の一つとして兵営の誘致があり、それが実を結び、1908(明治41)年に陸軍歩兵第六十三連隊が松江市長志原に入営したという歴史がある<sup>16)</sup>。

このため、現在の緑山公園をはじめ、いくつか関連史跡も存在し、地域の人々にとって同連隊の歴史は現在も身近に存在するからである。このコラムを見て、よく行く公園がかつて陸軍墓地であったことを初めて知った、と話してくれた来場者もあった。

最後に④展示方法について工夫した点として、当館の資料だけではなく、



写真2 企画展のパネル

山陰中帰連の後継組織である「山陰中帰連を受け継ぐあさがおの会（以後、あさがおの会）」が所有する関連資料も展示期間借り受け、展示することが出来たことがあげられる。当館では所蔵していない関連図書も多く、中帰連の活動を知る上で、大変貴重な機会となった。特に『覚醒<sup>17)</sup>』という、戦犯教育を記録的にまとめている図書



写真3 展示の様子（奥がDVDデッキ）

については、日本軍兵士が繰り返した残虐な光景をそのまま写真に収めており、衝撃を受けた来場者もあった。他にも、中帰連の活動を知る『季刊中帰連<sup>18)</sup>』も、創刊号からほぼ全て借り受け展示した。これら二点については、あさがおの会からの要望で、来場者がすぐ手に取れるところに展示し、自由に閲覧できるようにした。

中でも、今回展示では実験的に、山陰中帰連で撮影・制作した会員の戦争体験を記録した証言ビデオを許可を得て常時放映した（写真3）。また、難波氏へのインタビューを撮影・記録したDVDも、証言ビデオと交互に放映した。これらは来場者に好評で、特に地域のご年配の中には、自分の戦争体験と重ね合わせて、様々な思いを持って視聴した後、感想を筆者に語ってくれる人もあった。

その他、今回は展示目録を作成し、パネルや記録史料、図書、雑誌に分けてリスト化した。パネル以外の展示史料については、その所蔵場所を明記した。

## 2 企画展の課題

### 2.1 アンケート分析

企画展を開催した後、様々な検証を行うため、来場者にアンケートを求めた。アンケート用紙は2種類用意し、一つは当館で過去に開催された展示で実施したアンケート用紙と同じ物を用意した（来場者アンケートその1、写真4）。これは、シートに所属が明記されており、来場者に自分の所属にシー



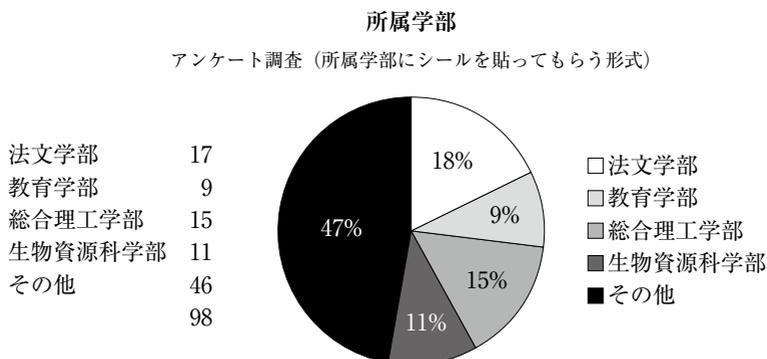


図1 来場者アンケートその1

し増やし、「学外者」の項目を設けておくべきだった事である。

一方で、後者のアンケート調査では、7名の回答があった（図2）。この数から見ても、実際の来場者に対して回答率が低かったため、もう少し工夫が必要であった。まず、回答者の身分については教職員、一般利用者、学生いずれも1～3名の回答があった。さらに所属の内訳として、法文学部、教育学部がそれぞれ2名、その他が3名となっている。具体的な項目に関しては、企画展の趣旨やパネル、資料内容について質問を行い、いずれも「①良く分かった」の評価となっている。

筆者が特に聞いたかった展示についての意見・感想では、「時宜にかなっている」「夏に開催され、思うところが多かった」「中帰連の活動を初めて知った」「一人でも多くの学生・市民に見てもらいたい」など、ほぼ好意的な感想をいただいた。中でも、「戦争について考えることはこれからの時代にも大切にしたい」と書いた学生の言葉に、企画展を開催した意味があったと実感できた。

## 2.2 企画展の課題

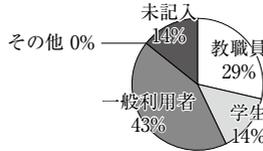
ここでは、アンケート分析を踏まえて、企画展の反省と今後の課題について述べてみたい。

全体的な反省として、やはり学生の来場者が少なかった、という点である。これは、シールでのアンケート用紙に身分を加えていなかったため、実際に

戦争と平和を考える2014アンケート結果

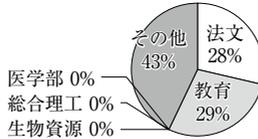
〈身分について〉

教職員	2
学生	1
一般利用者	3
その他	0
未記入	1



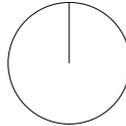
〈所属〉

法文	2
教育	2
生物資源	0
総合理工	0
医学部	0
その他	3



1. 企画展の趣旨について

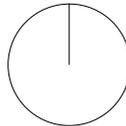
①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
- ②概ね分かった
- ③あまりよく分からなかった
- ④分からなかった

2. 企画展のパネルの内容について

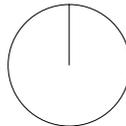
①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
- ②概ね分かった
- ③あまりよく分からなかった
- ④分からなかった

3. 企画展の資料の内容について

①良く分かった	7
②概ね分かった	0
③あまりよく分からなかった	0
④分からなかった	0



- ①良く分かった
- ②概ね分かった
- ③あまりよく分からなかった
- ④分からなかった

4. その他、展示についてご意見・ご感想など

- ・戦争について考えることはこれからの時代にも大切にした。 (法文・学生)
- ・日本軍が中国に侵略して大犯罪を犯していた事実を再認識したが、若い世代、および今の政治家はその認識もなく、黒を白と言いくるめる無知を何とも思っていないのを恐ろしいと思う。日本は危険な国になったと思う。(一般)
- ・今まさに「戦争のない世界」について考えるべき時であり、ちょうど夏に向けての開催で、思うところが多かったです。中帰連の活動については知らず、今なお語りつづけておられる事に感銘を受けました。高齢になられていく中で、我々がどう受け継ぐか、考えさせられます。(教育・教職員)
- ・このご時世にあって、図書館が重要かつタイムリーな企画を催して下さったことに感謝します。(法文・教職員)
- ・ビデオ上映があり良かった。戦争とはどういうものか、加害の事実を伝えること、今こそ重要だと感じました。(一般)
- ・時宜にかなった企画に敬意を表します。一人でも多くの学生・市民に見てもらえるよう願っています。(教育・身分記名なし)
- ・今こうした展示は絶対に必要だと思います。(一般)

図2 来場者アンケートその2

どの程度の学生が来場したかは不明なのであるが、展示室にやってくる来場者の様子を時折見ている、多くは一般利用者であった。今回は地域と戦争との関わりがテーマの展示だったため、多くの学生にとっては地元出身でもなければ「身近」なものとは捉えにくかったのかもしれない。今後は、学生にもっと来場してもらえるよう、学生が興味を持ちやすく、分かりやすい展示方法を検討し工夫する必要があるだろう。この点については、来場した教員から「何かの授業とタイアップすると、学生も足が向きやすいのでは」というご指摘もいただいた。次回以降は、教員の授業と連携を取れるように、関係授業をリサーチし、担当教員とも議論を深めながら、企画展に活かせるようにしたい。

また、今回中国の留学生が来場してくれたが、ほとんど日本語が読めないため、パネルの意味を理解するのに、引率した教員が適宜解説をしていた。展示方法についても、留学生向けに英語や中国語でのキャプションやガイドも用意するなど、配慮をするとさらに展示の意義が深まり、良かったのではと感じた。

### 3 企画展の広がり

#### 3.1 ギャラリートークの開催

企画展を開催中、学内の教員からこの企画展のギャラリートークを島大9条の会で開催したい、という依頼があった。島大9条の会とは、「9条の会」の理念に賛同する島根大学教職員によって、2006年5月に結成された組織で、学生を含め177名が賛同し、学習会などを不定期に開きながら活動している。依頼の内容としては、企画展の趣旨や、資料の解説を行いつつ、地域で戦争を語り継ぐことの重要性などを筆者が話すことで、それをもとに参加者で気軽に議論したいということであった。

筆者もギャラリートークが出来ればと思いながらも、他の業務に追われ、計画できずにいた。そこで、その内容を係長会議に諮り、了承が得られたため、日程調整の結果10月3日18時より開催することになった。当初、先方は展示室を想定していたが、展示室自体がそこまで広くないため、椅子を用意出来ないことから、同じフロアにあるラーニングコモンズにてギャラリートークを行うことになった。人数が全く予想できずにいたが、おそらく10名

程度であろうと考え、こぢんまりとしたイベントになることを予想していたが、実際には20人程度の参加があった。参加者の半数は教員で、残り半数はあさがおの会のメンバーを含めた一般の人々であった（写真5）。



写真5 ギャラリートークの様子

ギャラリートークでは、まず筆者が企画展の趣旨や簡単な山陰中帰連史料に関する解説を

行った後、筆者の解説に対するコメントを担当した教員から、史料を寄贈した難波靖直氏について紹介があり、戦争が「普通の人々」にもたらす影響などについて話があった。その後、再び筆者が引き継ぎ、中帰連についての解説や戦争体験を史料として受け継ぐ事の意義や、図書館の役割について述べた。

その後、フロアも交えたフリートークに移り、一般の参加としてあさがおの会会員から、会の結成経緯や活動について説明があり、中帰連会員の戦争体験だけではなく、自分たちの戦後の体験をも様々な機会を捉えて語り継いでいきたい、という話があった。このフリートークの時間では、教員や一般の方があさがおの会について質問をし、それについて会員が答える、という場面が多くみられた。会の運営や活動の実際については筆者が知らなかった事も多く、話を聞くにつれ、語り継いで行く事の大変さを感じた。

最後に展示室へ移動し、実際に史料を見ながら、時折これまでの来場者の反応なども交えて解説を行った。参加した教員からは、「とても良かった」「地域にこのような組織や資料が残っていたことを知ることが出来て良かった」という声をいただいた。また、一般の方からは、「大学の方と交流が出来て、本当に有意義な時間になった。ありがとう」という声をいただいた。

このように、ギャラリートークは盛況なうちに終えた。

### 3.2 教養科目「平和学」との連携

企画展終了後の後期から、教養科目「平和学」が開講された。これは、法

文学部をはじめとした様々な専門分野の教員によって、平和に関する講義がオムニバス形式で行われており、受講者も多い。島大9条の会を經由してこの平和学の講義の様子を聞くにつれ、授業で取り上げられている図書を当館で展示できないか、と考えた。

そこで、「平和学」を取りまとめている教員に連絡を取り、ぜひ当館で図書の展示をさせてもらいたい、と相談した。また、展示の際に製作するPOPについても、推薦した教員からそれぞれ可能な限りコメントをつけてもらえるようお願いした。その教員からは快諾を得て、平和



写真6 平和学の図書展示

学の各担当教員への依頼やその回答などの窓口になっていただくことができた。この推薦図書は、予想以上に多く寄せられ、12人の教員から、実に28冊の推薦図書をいただいた。しかも、ほぼすべてにコメントを付けていただいていた。そのため、当初予定していた展示用書棚では足りず、急遽展示台を追加するという事態となった。大変ありがたいことである。通常、授業の推薦図書はなかなか情報が寄せられない中で、今回のように多様な教員からの推薦図書展示は珍しく、その意味でも良い事例となったと思われる。

この図書展示を構想したのが、11月下旬であったことから、教員へ依頼し、12月中に推薦図書の中で図書館に所蔵されていない図書については新規購入し、いただいたコメントを入れたPOPを製作する等の準備を行った。展示方法としては、従来図書館で継続してきた図書展示「ブック☆コンパス」とのコラボレーションとして、2015年1月7日よりスタートし、2か月にわたり展示した<sup>19)</sup>(写真6)。入館ゲートの正面という場所もあってか、学生が足を止め図書を手に取る様子もよく見られた。

一つの企画展をきっかけとし、教員と連携して新たな企画を実施したことは、今後の図書館における展示を考えるうえでも貴重な経験であったといえる。

## おわりに

戦争を体験した人はもちろん、その体験を聞く機会も少なくなっている中、地域の戦争体験、戦後体験をどのように継承していくのか。それは、地域の様々な場所や場面で、意識的に機会を設けて出来るだけ多くの人々に語り伝えていく事が必要であろう。その際、大学図書館は何が出来るのか、どのような役割が求められるのだろうかと考えた時に、このような企画展が図書館としての一つの「答え」となるだろう。山陰中帰連資料のように、戦争や平和を語る史料は、「歴史学」はもとより、「平和学」にも接する史料である。展示を見た来場者が、何を思うのか。それは多様であって良い。その多様さこそ、平和学の基本であり、その多様さから自由に議論していくことが重要なのである。展示を見て「何か」を感じて「考えて」ほしい——そのためには、尾崎がサブジェクトライブラリアンから感じたように<sup>20)</sup>、日頃から世界の出来事に目を向け、様々な視野を拡げておくこと、そして所蔵資料を活かしきるような知識や専門性を自己研鑽していくことが、このような史料を持つ図書館職員として自分に出来ることなのだろう、と考える。

かつて村上が指摘したように<sup>21)</sup>、ユネスコ憲章で示された「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という理念のもと、図書館が果たす役割は、非常に重要なのであるが、現在の図書館界ではかつて全国図書館大会で採択された「訴え」とともに、その意識も風化しているのではないかと感じる。積極的にあらゆる資料を提供する努力を、図書館員は館種にかかわらず実践していく必要があるだろう。学内で「平和学」の講義が開講されることを見ても、図書館に求められている役割は自明である。

今回の企画展は、その実践の一つであるが、この試みを通して、学内の教員や学生、さらには地域の人々との交流が生まれた。ここで深められた地域史料を通しての平和への共通理解は、そこからさらに広がりを見せて新たなつながりが形成されていけよう。今後も図書館という「場」を通して、「戦争と平和」を思い、理解していく意識の土壌を形成することに寄与したいと考えている。

## 付記

企画展を開催するにあたり、当館の広報チームおよび情報サービスグループのスタッフには様々な助力をいただいた。また、山陰中帰連を受け継ぐあさがおの会代表西村弘命氏には、多忙な中貴重な資料の貸借に尽力いただいた。ほか、法文学部の関耕平先生、竹永三男先生にはギャラリートークの開催を呼びかけていただき貴重な経験をさせていただいた。そして同学部の片岡佳美先生には、平和学との連携において様々なお足労をおかけしお世話になった。記して御礼申し上げます。

## 注

- 1) 最近の論文では、田中麻巳が大学図書館の展示の実態や図書館員の認識に関して検証・分析している。田中麻巳. 大学図書館における展示の実態と図書館員の認識. 大学図書館研究. 2014年, (101), p83-92.
- 2) 米澤誠. 特集. 図書館の発信情報は効果的に伝わっているか? : 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法. 情報の科学と技術. 2005年, 55 (7), p 305-309.
- 3) 篠塚富士男. 特集. わが図書館のコアコンピタンス : 大学図書館における展示会活動 : 図書館展示の分析および筑波大学附属図書館の事例報告. 大学図書館研究. 2007, 80, p43-53.
- 4) 島根大学憲章では、「知と文化の拠点として培った伝統と精神を重んじ、『地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学』を目指すとともに、学生・教職員の協同のもと、学生が育ち、学生とともに育つ大学づくりを推進する」と謳っている。URL: <http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/policy/mission/>を参照。
- 5) 90、91年の特集は「図書館の異文化サービス」をテーマとしていた。
- 6) 図書館反核平和の会設立準備有志. 図書館反核平和の会設立のためにご協力を。(反核・平和の運動を考える〈特集〉). 図書館雑誌. 日本図書館協会. 1984-08, 78 (8), p478-480.
- 7) 村上美代治. 「図書館反核平和の会」の活動と今後の課題について。(戦後50年—図書館と平和〈特集〉). みんなの図書館. 図書館問題研究会. 1995-08, 220, p38-42.
- 8) 村上前掲論文, p40.
- 9) 村上前掲論文, p41.
- 10) 同上。

- 11) 日本図書館情報学会総務委員会. 日本図書館情報学会メールマガジン. 2004-10-14, No.099. (<http://www.jslis.jp/mm/MM099.TXT> (2015-01-20参照))
- 12) 尾崎文代, 和田由季. 北欧平和学図書館調査報告および平和学関連事業計画. 大学図書館研究. 大学図書館研究編集委員会. 2005-08-01, 74, p65-73.
- 13) 企画展の様子については、島根大学附属図書館のブログにも掲載している (<http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2014/07/03/132649>)
- 14) 島根大学学術情報リポジトリSWAN (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/repo/>)
- 15) 小林奈緒子. 戦争体験といかに向き合うか：山陰中国帰還者連絡会の活動を事例として. 山陰研究. 島根大学. 2011-12-31, 4, p37-56.
- 16) 竹永三男. 初代松江市長福岡世徳：その旅と松江振興策. 山陰研究ブックレット2. 島根大学法文学部山陰研究センター, 2013. などに詳しい.
- 17) 群衆出版社 and 長城(香港)文化出版公司. 覚醒：日本戦犯改造紀實＝目覚め：日本の戦犯の教育と改造の記録＝Awakening：a record of educating and reforming of the Japanese war criminals. 羣衆出版社, 長城(香港)文化出版公司, 新華書店總店北京發行所(発行), 1991.
- 18) 中国帰還者連絡会の機関紙. 1997年6月より発行。現在は「NPO中帰連平和記念館」より刊行を続けている。
- 19) 展示の様子については、当館のブログ (<http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2015/01/07/141342>) を参照。
- 20) 尾崎前掲論文, p72.
- 21) 村上前掲論文, p40-41.



# JapanKnowledge Lib.を活用した研究

島根大学学術情報機構附属図書館長 田 籠 博

## 1 研究計画

定年を目前にして一つの計画を立てた。ある文献資料を電子化し、その用語に関する研究成果を発表して退職を迎えようと思った。対象にしたのは室町時代の言語資料として有名な桃源瑞仙の『史記抄』（文明9年1477成）。この活字本『史記桃源抄の研究 本文篇』6冊（計3,000頁）をOCRで取り込み、パソコンで自在に利用できる形に整え、それによって用語の性格を明らかにしようと考えた。

3月から作業を始め、休日も趣味を諦めながら多大な時間を費やして、8月末ようやく第一段階を終えた。しかし、用語の性格を検討する方向で中々適切なアイデアが得られず、しばらく索引作成などでお茶を濁す時期もあった。

そんな時、附属図書館のHPから使用できるデータベースの中に「JapanKnowledge Lib.」があり、そのコンテンツに筆者が日頃利用する『日本国語大辞典』（小学館）が含まれていることを「発見」した。

以下の記事は、それを利用した筆者の経験にもとづく。

## 2 『日本国語大辞典』の用例探し

日頃使用する辞典は大型本で、当然のことながら重い。棚から取り出し、頁を繰って目的の項目を探し、語釈（語の意味・用法の説明）を読み、そこに引かれている用例を見る。

一方、データベース化された辞典では、冊子体では思いも寄らない調査方法を取ることができる。『日本国語大辞典』（『日国』）全体から、『史記抄』の用例がいくつ、どの語項目にあるかを瞬時に探せるのである。

筆者は、『日国』における『史記抄』用例の在り方を調査することによっ

JapanKnowledge Lib

基本検索 詳細(個別)検索 本欄

目録検索(辞書名) 日本国語大辞典

範囲: 全文(見出し+本文) 条件: 範囲: 見出し

項目数: 20件

1. あいふ【あいふ】**【同・合】**  
 例)一七この数や目のあひの、例の数の目のあはひよりも近くて、目の色もあはひはけければ。**【史記抄】**  
 【1477】一四・扇屋公列伝「目小ならば指のあひもなれに可...

2. あいふら【あいふら】  
 受け答へること。あふらふ、(イ)人に対して応答すること。待遇すること。また、もてなす。**【史記抄】**1477  
 三・陶本記「魯武公の平朝、たる時のあふらひに、平...

3. あいふら【あいふら】**【合句】**  
 【名】(續撰で歌味方の区別性をきりきりするために、笠、袖その他、置綴の一部につける一定の目印。\*)**【史記抄】**1477  
 一六・博覧本記「一軍のあふらふに、す」\*見見...

4. あいふら【あいふら】**【同音】**  
 是なでもあふらふは、此買置を相付(あたい)と思はるる(4)何等であること。何等で事なすこと。**【史記抄】**1477  
 一六・考武本記「新」と云は枝...

5. あいふら【あいふら】**【同音】**  
 一、夷置兵衛人、道軍事「其の外命を軽んじ、義を重んじて、遂にて勝負を決せん」と相付に(相付ける)。**【史記抄】**1477  
 一四・素本記「あひのいことであるほどにあはれ...

6. あいふら【あいふら】  
 【名】(所置詞「あひ」でなりの目録に、他置語「ら」の付いたもの「あひ」でないこと。また、その置綴。\*)**【史記抄】**1477  
 一五・流置詞「我が子を食へばあふらふ...

7. あいふら【あいふら】**【同音】**  
 【名】他の書を次いで、二人以上で相付すること。また、その組み合わせ。相付書。**【史記抄】**1477  
 一六・素本記「これらも手紙の書をあいてあひつてやられた...

8. あいふら【あいふら】**【合句】**  
 \*申末記(1430)神事委仕の事「神事を本(ほん)にして、そのあひのまの上動からため、上下なり」

図 『史記抄』 検索結果

て、『史記抄』の用語の性格が測れるのではないかと予想した。日本語の代表的な辞典である『日国』における利用状況は、間接的ではあるが、『史記抄』の用語の性格を何らかの形で反映しているに違いない。

実際の手順は次の通り。附属図書館のHPから「電子リソース」を選び、「分野別データベース」の下にある「事典・辞書」の「JapanKnowledge Lib」を選択する。タイトル下の「詳細(個別)検索」にカーソルを当てると「日本国語大辞典」が現れるから、それをクリックする。

検索欄に「史記抄」と打ち、範囲を「全文(見出し+本文)」として実行すれば、たちまち検索結果が表示される。「史記抄」を含む見出し項目数、品詞などが左に示され、「史記抄」前後の記事が右欄に五十音順で表示される。親見出し項目が2,980、子見出しが117、字音要素が1である。

作業が簡単に行くと欲が出る。同じ室町時代の文献資料についても同様に調査して比較しようと考えた。同類の抄物、キリシタン資料、狂言資料について試みた。これも簡単に終えたので、他の時代の著名な文学作品についても同じ作業を繰り返した。

至って順調で楽しくなる。せっかく新しい調査方法を採るのだから、楽に行えるのが望ましい。全ての結果は表のようになる。

表 『日国』所見文献名の項目数 (親見出しと子見出しの合計)

史記抄	3,068	万葉集	8,736
毛詩抄	805	源氏物語	11,598
玉塵抄	2,311	枕草子	3,454
中華若木詩抄	1,192	今昔物語	4,447
虎明本狂言	3,686	平家物語	7,668
天草本平家物語	903	徒然草	2,433
天草本伊曾保	1,024	太平記	9,794

表から、『万葉集』『源氏物語』『平家物語』などには及ばないものの、『日国』が『史記抄』から数多くの用例を引いていることが分かる。その事實は、『史記抄』が室町時代語の資料として重要なものであることを示している。

### 3 用例検索の陥し穴

しかし、前掲の表には重要な問題点がある。文献名で検索した場合、目的のものだけでなく、類似する書名の文献までもが検索結果に含まれていることが判明したからである。

『徒然草』は江戸時代初めに大流行し、類似の書名をもつ作品が数多く作られた。表の数字には、例えば、『徒然草講談之事』『徒然草野槌』なども含まれている。『太平記』はさらに多く、『難太平記』『娘太平記』『化物太平記』など「～太平記」という書名、および『太平記大全』『太平記聞書』といった「太平記～」という作品も多く、全部で20作品以上もあった。

こうした不要な項目を排除するにはどうするのか。予め類名書が分かっているならば、それを別に検索し、その数を全体の項目数から除けばよい。しかし、類名書の全てを想定することはとてもできない。

実際には、大変素朴な話だが、検索した項目を一つ一つ見て、目的の書名と異なるものを数え上げ、それを差し引くことになる。『太平記』で試してみると、510項目が本来の『太平記』とは異なる書からの引用であった。1,000を超える項目を丹念に見ていくのは、相当の時間と根気を要する。

## 4 検索結果の問題

『日国』の検索ではもう一つ問題がある。検索結果として出力されるのが見出しの項目数であって、用例の数ではないことである。これは筆者などの調査では重要な相違を生み出す場合がある。極端な例だが、『徒然草』を一項目中に20例も引いている場合がある（助詞「に」の項）。従って、正確な用例数を知りたければ、やはり一項目ずつ記事を見ていかなければならない。

もう一つ、解説文中に現れる書名も検索対象になるため、用例が存在しない項目も含まれることがある。これも正確な結果を得るためには除外する必要がある。

三つめに、検索自体の問題ではないが、項目の表示数が系統的に1,000を超えたものは表示できないという制限がある。逆順にすれば2,000までは何とか可能だが、それ以上になると色々と工夫する必要がある。一般の利用であれば問題にならないことだが、研究的な利用では困ったことで、何とか改善して欲しい所である。

## 5 複合検索の効用

筆者の調査内容は、『史記抄』の用語が『日国』で単独例（『史記抄』の用例しかない項目）や初出例（その項目で最も古い例）、または最初例（語釈の各項目で最も古い例）かを調べることであった。その結果、全体の6割が何らかの意味で初出または最古の例であることが判明したが（因みに、『徒然草』は2割）、それについては今は述べない。

初出例や最初例かどうかは、語釈（語の意味・用法の説明）の後、用例の最初に『史記抄』があるかどうかで判断したが、そこで不可解な事実があることに気づいた。室町時代の辞書『文明本節用集』と『史記抄』との先後関係が、『日国』の中で定まっていないのである。

『史記抄』と『文明本節用集』との二つを鍵にして検索すると、『史記抄』を先に置くのが60項目、逆に『文明本』を先にするのが47項目あって矛盾し、初出例・最初例の判定に混乱をきたすのである。

わが国で最も信頼される『日国』に、こうした不統一があることを見出したのは興味深かった。冊子体の辞書では、個別の事例には気づいても、二つ

の書名を複合検索すれば直ちに結果を出すデータベースには到底及ばない。これは予想していなかった利用法である。

JapanKnowledge Lib.では三つの鍵語までの複合検索が可能だから、『万葉集』と『源氏物語』に用いられて夏目漱石の作品でも用いられている言葉を探す、などが簡単にできる。検索方法（AND,OR,NOT）を工夫すれば、筆者も気づかなかった利用法がまだ隠れているかも知れない。

研究発表の資料を昔はガリ版刷りで作成していたと言っても、最早だれも理解できない。資料作成にはワープロが当たり前になり、OHPも過去の道具となった。だとすれば、ここで紹介したような研究方法も一つの手段として認めてもらえるのかも知れない。

最後に、今後の利用拡大を考えると、本学でのユーザー数が2でしかないのは是正したい所である。



# ラーニングcommons 利用実態調査からみる利用傾向

島根大学学術情報機構附属図書館

情報サービスグループ 金子尚登

## 1 はじめに

島根大学附属図書館は平成24年度に耐震・機能改修工事を行い、平成25年4月4日にオープンしました。この機能改修としては、館内レイアウトの変更や各スペースの整理と再配置を行いました。その中で新たなスペースとして「ラーニングcommons」を設置しました。「ラーニングcommons」は複数の学生が集まって、様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するものとされています<sup>1)</sup>。平成18年に米澤誠氏により日本に紹介されると<sup>2)</sup>、大学図書館の新しい潮流として注目を集めるようになり、近県の国立大学に限っても最近図書館の改修工事を行った鳥取大学、岡山大学、山口大学、香川大学はいずれも「ラーニングcommons」を設置しています。

本稿は附属図書館が耐震・機能改修工事後再オープンしてから1年経過して、利用者が「ラーニングcommons」という新しいスペースをどのように使っているのか調査した結果を報告するものです。

## 2 当館ラーニングcommonsについて

当館においては建物の出入り口に近い西側に「ラーニングcommons」(1階、78㎡、座席数58)と「ラーニングcommons 2」(2階、51㎡、座席数21)の2か所に配置されています。利用者には、グループで話し合い等をする場合はこちらのスペースを利用していただけようをお願いしています。



写真1 ラーニングcommons

1階の「ラーニングcommons」はドアのないオープンスペースとなっており、58席中18席は窓側のハイカウンター席、残り40席はキャスター付きのイスで同じくキャスター付きのテーブルと、人数に応じて自由に組み合わせができるようになっています。また壁面および移動式のホワイトボードを配置して、グループ学習やディスカッション等で使用できるようになっています。その他プロジェクタや電子黒板などの設備を配置しています。



写真2 ラーニングcommons2

2階の「ラーニングcommons2」はやや狭いものの、キャスター付きのイスと机、ホワイトボード、プロジェクタなどを同様に配置しており、またドアを閉めて一つの教室のように使用することもできるようになっています。

### 3 調査の方法

調査期間は平成26年7月8日（火）～10日（木）（以下通常期）、および利用者が非常に多くなる定期試験期間にあたる同年7月29日（火）～31日（木）（以下試験期）の2回6日間としました。実際の調査は、職員および調査に関する説明を受けた学生アルバイトが行い、9：00から21：00まで1時間ごとに目視で利用者の状況を確認し、調査票に記入しました。その後各項目をデータ化し集計するという手順をとりました。なお調査方法は先行調査<sup>3),4),5),6)</sup>を参考に館内のワーキンググループで検討の上で決定しました。

### 4 結果

調査対象となった利用者の延べ人数を場所別、時期別、個人・グループ別に示したのが表1～3です。試験期は通常期よりも利用人数が倍以上に増えています。また「ラーニングcommons」は「ラーニングcommons2」より座席数は3倍弱ですが、利用している人数としては4倍弱とより利用が多くなっていました（表1）。また、「ラーニングcommons2」の方が、圧倒的にグループで利用する人が多くなっています（表2）。また、試験期になると

グループで利用する人の割合が増加しますが、それでも約25%の人が個人で利用しており、全体でも約30%の人が個人で利用しています（表3）。

なお、この調査に先立ち平成26年1月に図書館利用者に対して行った「図書館利用実態調査」アンケートにおいて、個人で学習する時とグループで学習する時に、もっともよく利用する場所はどこかという質問を行い、その結果が図1と図2になります。個人の時は1人掛けの席や個室のような静かで集中できると思われる席を選ぶ人もいる一方で、「ラーニングコモンズ」「ラーニングコモンズ2」をよく使うと答えた人が合わせて20%弱いました。またグループで学習する時に利用すると答え

た人は合わせて40%以上いることから、人によって学習する時に選ぶ環境に違いがあるといえ、「ラーニングコモンズ」が学習環境の新たな選択肢として定着しつつあると考えられます。

今回の調査では利用者の行動と利用している物も調査しており、その結果を個人利用とグループ利用にわけてまとめたのが図3と図4です。なお、利用者の行動と利用している物は一人で複数該当する場合がありますので、合計すると先にあげた利用者の延べ人数よりも多くなります。全体で最も多かった行動は「何かを書いている」で、利用している物では「ノート・プリント」という結果でした。また、ノートパソコンや携帯電話など電子機器を利用している人を合わせると、図書、雑誌、新聞など、いわゆる冊子体の資料を利用している人を合わせたよりも多くなっていました。また室内に設置された

表1 人数（場所別、時期別）

	ラーニング コモンズ	ラーニング コモンズ2	合計
通常期	503	133	636
試験期	1,058	289	1,347
合計	1,561	422	1,983

表2 人数（場所別、個人・グループ別）

	ラーニング コモンズ	ラーニング コモンズ2	合計
個人	567	34	601
グループ	994	388	1,382
合計	1,561	422	1,983

表3 人数（時期別、個人・グループ別）

	通常期	試験期	合計
個人	245	356	601
グループ	391	991	1,382
合計	636	1,347	1,983

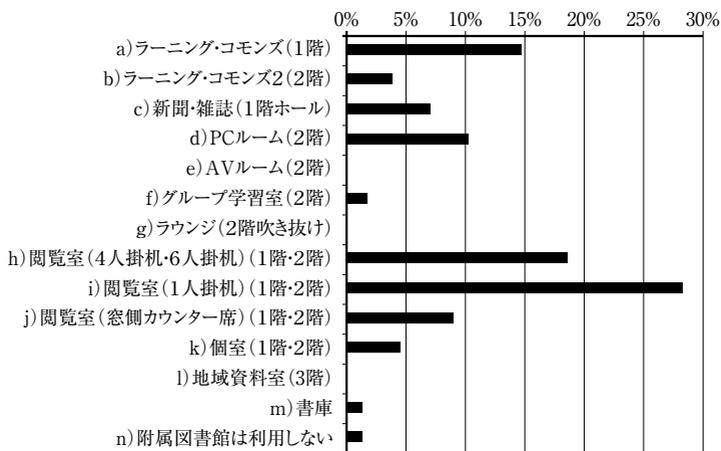


図1 個人で学習するときにもっとも利用する場所

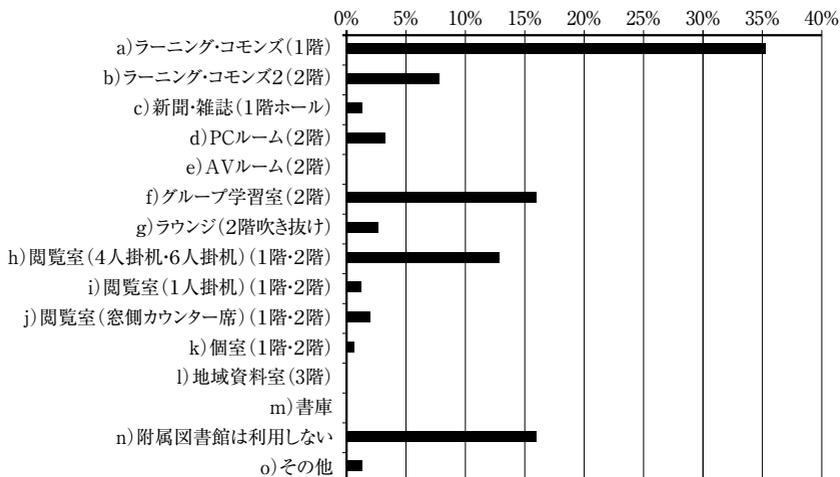


図2 グループで学習するときにもっとも利用する場所

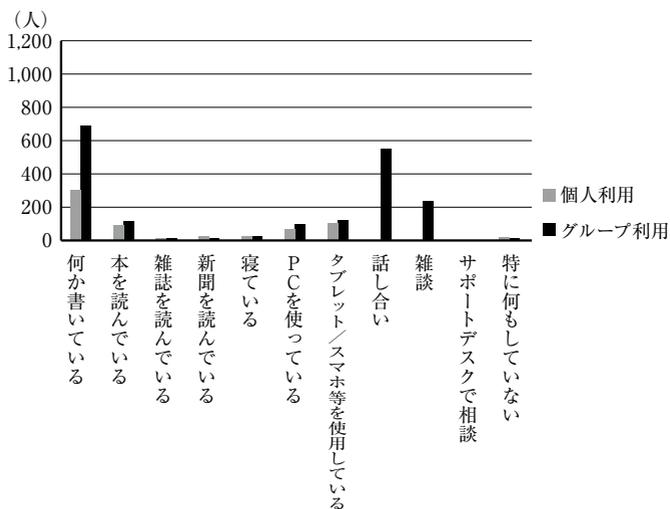


図3 利用者行動（個人・グループ別人数）

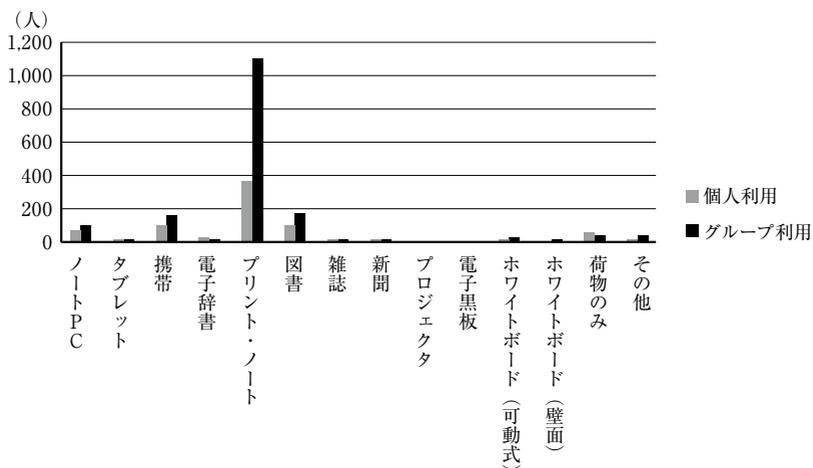


図4 利用物（個人・グループ別人数）

設備に関しては、電子黒板やプロジェクタを利用する人はおらず、ホワイトボードを利用する人も多くはありませんでした。

また興味深い現象として、グループで利用している人のうち、他の人と話をしている人（「話し合い」+「雑談」）は、せいぜい5割強にすぎませんでした。つまり残りの人は一緒にテーブルを囲んでいます。それぞれノートをとったり、本を読んだり、スマートフォンを操作したり、あるいは寝ていたり、と違う事をしていることとなります。

さらに利用者の行動と利用しているものを時期別にまとめたのが図5と図6です。最も多かった行動は「何かを書いている」で、利用している物では「ノート・プリント」という結果は同じでした。試験期は延べ人数が倍以上に増えていたこともあり、大部分の項目で試験期には人数が増加していますが、ノートパソコン（図中ではPC、あるいはノートPCと表記）を利用する人が試験期にはかなり減少しているのが目立ちます。ただ試験期には寝ている人、雑談をしている人、荷物を置きっぱなしにしている人など、好ましくない利用行動をとる利用者が人数、割合とも増加していました。

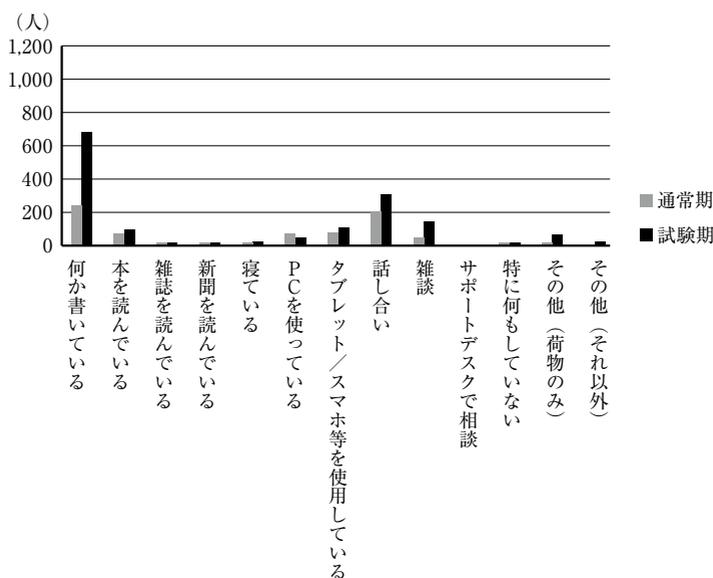


図5 利用者行動（時期別人数）

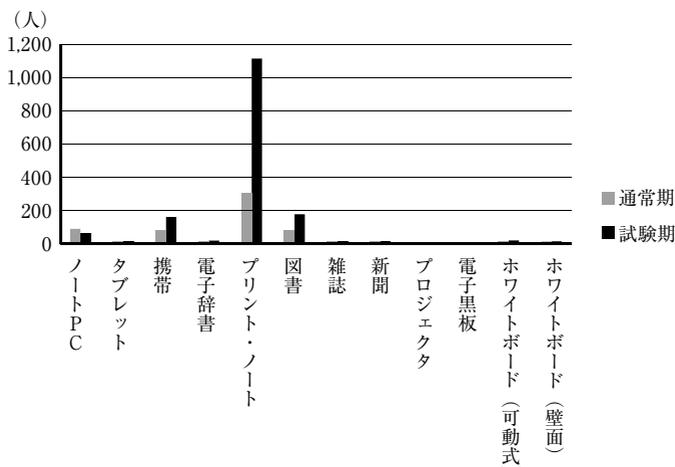


図6 利用物（時期別）

## 5 まとめ

今回の調査は1時間ごとにその時点での利用状況を切り取ったものですが、同じ利用者が長時間使用しているのか、短時間で利用者が入れ替わっているのか、同じことをしているのか、時間の経過によって違うことをするのかなど、ある利用者の時間経過による行動の変化にまでは踏み込めませんでした。

調査結果をデータ化し分析を加えるのが本稿の目的ですが、この調査結果を元に利用者のよりよい学修環境を提供するにはどうすればいいのか、改善策を検討し実施することが今後の課題になります。

平成25年4月に図書館が再オープンした当初は、職員側が「こう使ってほしい」と思っている、利用者が「ラーニングコモンズ」というスペースを、どう利用していいのかわからずとまどっているようにみうけられました。しかし改修後1年が経過してから行ったこの調査結果をみると、学生にとっての学習スペースの新たな選択肢として定着しつつあるようです。

注

- 1) 文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室. “用語解説”. 文部科学省. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm), (参照2015-1-26).
- 2) 米澤 誠. 動向レビュー インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- 3) 立石重紀子. 大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態—横浜国立大学附属図書館における観察調査. 三田図書館・情報学会研究大会発表論文集. 2009, vol.2009, p.5-8.
- 4) 津村光洋. 鳥取大学附属図書館のラーニング・コモンズ. 鳥取大学教育研究論集. 2011, no.1, p.97-102.
- 5) 三根慎二. ラーニング・コモンズはどのように利用されているか：三重大学における事例調査. 三田図書館・情報学会研究大会発表論文集. 2012, p.25-28.
- 6) 毛利志保, 加藤彰一, 長澤多代, Khasawneh Fahed A. “「大学図書館ラーニングコモンズにおける利用実態調査」ポスター”. 大学教育改革フォーラムin東海2012. 名古屋大学, 2012-3-3, 2012, p.1-2, 入手先, 三重大学学術機関リポジトリ研究教育成果コレクション, <http://hdl.handle.net/10076/12026>, (参照2015-1-30).





## 自著紹介

### 『経験のアルケオロジー』

——現象学と生命の哲学』

(勁草書房、2010年12月)

川瀬 雅也

(島根大学教育学部共生社会教育講座准教授)

学問とは、通常、「知らない」ことを研究して「知る」ようになることをめざすものだろう。つまり、未知を既知に変えることをめざすものだと言える。しかし、哲学という学問はそのあたりが少し異なる。哲学が解明しようとするのは、多くの人がすでに「知っている」ことである。つまり、多くの人にとっての「既知」こそ、哲学にとっての課題なのだ。いったい、どういうことだろうか？

「多くの人が知っていること」が哲学の課題になるというのは、決して、哲学が少数の知らない人のためにあることを意味するのではない。そうではなくて、哲学は、多くの人が「知っている」ことが、実は、多くの人が「知っていると思っているだけ」のことではないのか、と問うのである。人々が「既知」だと思っていることは、本当に「既知」だと言えるのか、を問題にするのである。

既知のこと、すでに知られたことは、当たり前だとみなされ、未知を探究するための土台、前提とされる。当たり前として前提されることは、そこから問いが出発する土台なので、通常、それ自体が問われることはない。だが、哲学が問題にするのは、まさにこの土台、前提である。例えば、いま私は「未知を既知にする」と言った。誰でもが、この言葉の意味を理解するだろう。だが、そもそも未知と既知の相違はどこにあるのだろうか？ 何が分からないことを「未知」と呼び、何が分かったことを「既知」と呼ぶのか？ さらに、「知る」とはいったい何を意味するのだろうか？ このように問われると、分かっていたはずの言葉の意味が、目の前で次々と瓦解していくような気持ちにされるだろう。私たちは、本当は分かっていることについて、どれだけ「分かったつも

り」になって事を運んでいることだろうか。もちろん、そうした姿勢を批判しようというのではない。おそらく誰でもが（私だって）、「分かったつもり」で事を運ばなければ、ともに日常生活を送ることさえできないだろう。しかし、自分が「分かったつもり」であることを知っているのと、知らないのとでは、つまり、「自分は本当は分かっていないということを知っている」と、「自分が分かっていないことすら知らない」とでは雲泥の差がある。哲学はそこを問題にする。まずは、「自分が本当は分かっていない」ことを知ること、そして次には、その分からないことについて探究する姿勢を持つこと、これが哲学的課題なのだ。

「経験」というものも、日常的には分かっていること、分かったつもりになっていることだと言えるだろう。目を開けば事物が見える。音や匂いを感じられる。食べる、飲む、話す、住む、通う、などなど、「経験」というのは誰にとっても全く自明の事柄である。だが、哲学にとっては、当たり前こそが問題となる。当たり前であるということは、多くの人がそこに問題があることに気づいていないことを意味するのだから、哲学にとっては、当たり前であればある

ほど、大問題となるのだ。「経験」もその「大問題」の一つだと言えよう。拙著『経験のアルケオロジー』は、まさに、この「大問題」としての「経験」をテーマにして、経験の構造はどのようなになっているのか、経験はどのような源泉から可能になっているのか、そして、経験の深層にはどのような世界が広がっているのか、という問題を、哲学的な観点から探究した学術書である。

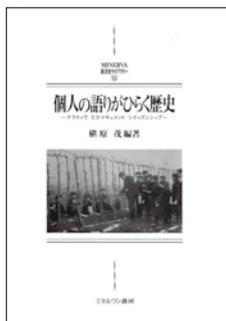
だが、拙著は、ただ単に「経験」を哲学的に探究しているだけではない。拙著でこのテーマを選んだのは、実は、現代哲学の一つの潮流として「経験のアルケオロジー」という動向が存在していることを示すためであった。本書では、主に20世紀の100年を見渡し、その中で、フッサール、ベルクソン、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、ミシェル・アンリなどのドイツ、フランスの哲学者たちを取り上げているが、こうした諸々の哲学者の思想のうちに、「経験の起源の探究」(アルケオロジーは「考古学」を意味するが、それはもともと「起源の探究」という意味であった)という共通の動向が認められることを解明し、そうした探究のたどり着いた地点を見極めることが本書の狙いだったのである。

20世紀のドイツ、フランスの思想のうちには、「経験のアルケオロジー」と名づけることのできる動向があり、それは、経験の構造の解明から出発して、その起源を突き止め、さらには、経験の底を破った先に現れる経験の深層へと探究を掘り下げていった。こうした探究が、どのような筋道を通り、どのような深層世界を見いだしたのかについては、ぜひ、本書を手にとって確かめていただけたらと思う。

哲学の入り口というのは、実にたわいないものである。「経験」などまったくありふれていて、つかみどころさえない。私たちは、日常的な「経験」を土台として、その上で諸々の問題（科学、政治、経済、文学、芸術等々の問題）に関わっているのだから、この土台そのものは考察の視野のうちにさえ入ってこない。「経験」など、問題にさえならないつまらないものである。だが哲学は、とりわけ、20世紀の哲学は、この「たわいない」、「つまらない」経験のうちにこそ、人間の存在を本質

的に理解する鍵があると考えた。その探究は実に豊かで、深遠なものである。「たわいない」、「つまらない」入り口の下には、実に豊かで、複雑で、しかし、調和の取れた目くらむばかりの世界が広がっている。あたかも、何の変哲もない、ありふれた地上の洞穴の下に、清らかな水をたたえ、鍾乳石と石筍という自然の造形美に彩られた鍾乳洞の大伽藍が広がっているかのごとくである。もし、入り口のたわいなさにあきれ果てて、その下を覗き込みさえしなければ、私たちは、地下に広がる豊饒の世界に気づくことも、それを掘り下げることができないだろう。哲学は、たわいない出来事のなかにこそ、計り知れない探究の糸口を見いだすのである。

拙著『経験のアルケオロジー』のテーマである「経験」は実にたわいない。だが、もし拙著を手にする機会があるならば、そのたわいなさの中にどれだけの豊かさや奥行きが包含されているかを、ぜひ覗き込んでいただけたらと思う。



自著紹介

『個人語りがひらく歴史』  
—ナラティブ/エゴ・ドキュメント/シティズンシップ』

(ミネルヴァ書房、2014年10月)

榎原 茂

(島根大学教育学部共生社会教育講座教授)

今からおよそ100年前の19～20世紀転換期には、初期のグローバリゼーションが進行する一方で、帝国主義的対抗と国民統合の進展、社会主義勢力の台頭、人種主義の広まりなどにより、シティズンシップ（市民の権利や資格、アイデンティティ）が問い直されました。そして、識字力の向上と交通・通信手段の発達により民衆層における社会的・文化的自己認識も組み直されるなかで「自分」を語った手紙、日記、回想録、自伝などが大量に生み出されました。近年、これらの史料は「エゴ・ドキュメント」と総称されます。

本書は、エゴ・ドキュメントをシティズンシップと関連させて読み解くことを目的としています。その際、対象とする個人＝市民を、「自律的であろうとする個」として捉え、彼／彼女らのアイデンティティが共同性、公共性とどのように関わって

たのかを重視しています。

科研で共同研究をおこなった仲間たちによって、全7章のそれぞれにおいて、世紀転換期から20世紀前半に生きた個人の語りを読み込まれ、市民の歴史が紡がれています。これらの個人が暮らしたのは、ナチ体制下のベルリン、スターリン体制下の収容所、ニューヨークのユダヤ人街、メキシコの先住民地域、ロンドン港、ベル・エポックのパリ、フランス中部の農村とさまざまです。第I部「アイデンティティを問う『自分』とシティズンシップ」の第1章は、ユダヤ人妻をもったアリア人作家ヨッヘン・クレッパーがナチ国家による否認圧力に抵抗し、家族とともに自死にいたるまでの日記や書簡を読み解きます。第2章は、1920年代にトロツキー派に属したため収容所に送られ、スターリン死後に帰還した2人の人物、アンドレイ・ゾート

フとM.D.バイタルスキーの自伝的回想録を取り上げ、彼らにとってのシティズンシップの意味について考察しています。そして第3章は、アメリカ革新主義時代に生きた女性労働者、ローズ・シュナイダーマンの回想を分析しながら、彼女が自分のなかの「女性」「労働者」「移民」「ユダヤ人」という非「市民」的属性とどのように向き合ったかを論じます。

第Ⅱ部「新しい社会をもとめる『自分』とシティズンシップ」では、第4章が、1920年代以降のメキシコにおいて国家による先住民地域の文明化・近代化が進められた際、その尖兵の役割を負わされた農村教師の1人サルバドール・ソテロ＝アレバロの自己認識の変化と市民的パフォーマンスを回想録からたどります。つぎに第5章は、ロンドン港湾労働組合運動の指導者ベン・ティレットの発言と、その後執筆された自伝の記述とのズレを手がかりにして、彼のシティズンシップ論の特徴を引き出します。他方第6章では、フランス第三共和政期の民主派司祭ピエール・ダブリの自伝を中心史料として、世俗的共和国に生きるカトリック聖職者がシティズンシップをどのように自己のアイデンティティ

に組み込み、民主政とかかわろうとしたのが論じられます。さらに第7章は、ブドウ栽培農ジュール・ルージュロンの手紙の読解を通して、同じ第三共和政による国民統合政策の主なターゲットとされた農民層における書く行為・習慣が公共性や農村の共同性の変化とどのように関係していたのか、問いかけます。

さて、こうして本書は「ミクロな歴史」の可能性を問おうとしていますが、ここでは、本書にまつわるさらにミクロなエピソードを紹介したいと思います。出版社に入稿して数ヶ月後、編集会議でゴーサインが出たという知らせがありました。「Minerva西洋史ライブラリー」の1冊として出すので、については表紙カバーに載せる図版を考えておいてくださいという言葉が添えられました。カバーの形式は同シリーズに共通のもので、書名の下には必ず図版が置かれています。この図版選びが意外にむずかしかったのです。

何しろ私たちの論集の主題は「個人の語り（パーソナル・ナラティヴ）」なので、テーマに直接かかわる図版といえば、日記や手紙の写真ということになりましょう。ところがこれらの断片的な写真を載せても、絵になりにくいわけです。そこ

で、むしろ抽象画やデザインはどうかという提案をしたら、シリーズの形式に合わないので、やはり写真など具体的な図像にしてほしいとの返事。思案の挙げ句、思い浮かんだのが第7章の主人公、ジュール・ルージュロンが地元の小学生にブドウの接ぎ木について解説している写真でした。ある本で見かけた写真が印象に残っていました。これなら「語り、伝える」というメッセージを込めることができるのではと編集担当者に提案すると、OKだが、できればもっと鮮明なものがほしいとのこと。うーむ、弱りました。

ここで、ルージュロンの子孫の方々とはご縁に救われることとなります。2009年にフランスのアリエ県文書館で史料調査をおこなった際にたまたま地元紙の取材を受け、記事が掲載されたことがありました。そして2012年の秋、ルージュロンの孫のジョルジュ・ラグランジュさんから突然お便りをいただきました。マルセイユにお住まいでしたが、記事を読んだ知人が私のことを教えてくれたそうで、新聞社から私の勤務先を聞き出し、わざわざ手紙をくださったのです。とても感動しました。その後手紙のやりとりがありました。その後手紙のやりとりがりましたが、残念なことに翌年の夏に92歳で

亡くなられました。その折に息子のステファヌさん、つまりルージュロンの曾孫にあたる方も幾度かメールを交換していました。

写真の話にもどります。鮮明な画像を入手するには、直接カメラで撮影するしかありません。一方で、出版予定の10月まであと2ヶ月ぐらしか残されていません。こうなったらダメ元、写真を貸してもらえないかステファヌさんにきいてみることにしました。ところが届いた返信には、アルジェリアの石油プラントに出向中で、マルセイユで保管しているルージュロンの文書を探すのは無理とのことでした。ただ、パリで法学を学んでいる甥のベルナール・ブドゥーさんがバカンスで8月末にマルセイユに帰るはずだから、彼に探してみるよう頼んでおくとのことでした。とても間に合いそうにありません。万事休す、やはり本に載っている写真を使うしかないかとあきらめかけていた矢先、ブドゥーさんが帰省をすこし早めたとのことで、なんと件の写真がメール添付で送られてきたのです。すぐに出版社に送ると、なんとか間に合うという返事でした。どれほどうれしかったことか……。人の縁のありがたさに心打られました。ですから、もし本書を

手にとっていただけるなら、カバーの写真にも目を留めてやってください。子どもたちの表情までわかるはずです。

私は、「神は細部に宿る」、「ミクロな歴史にこそ真実が隠されている」などと言いたいわけではありません。ただ、何かにつけて「グローバル」流行りで、歴史学においても「グローバル・ヒストリー」なる潮流が勢いさかなさまを見るにつけ、大事なことは他にもいろいろありますよと言いたくなるのです。グローバル・ヒストリーが従来の国家・国民を主語にした歴史の見方や

語り方を変革してきたことは認めますが、歴史のオルタナティブは多様であってよいと思います。最近、フランス革命史の泰斗リン・ハントさんが新著のなかで、同じようなことを——ずっと洗練された議論で——言っておられることを知りました。権威づけるつもりはないですが、まんざらでもない気分です。私にとって、無名の個人の歴史を探究し、叙述することは、ミクロな世界に耽溺することではありません。そこから、関係がつながり、世界が開かれることが大切だと考えています。ちょうど私たちの人生のように。



自著紹介

『宗教生活の基本形態——オーストラリアにおけるトーテム体系』上下

(ちくま学芸文庫、2014年9月)

エミール・デュルケーム 著 (山崎亮 訳)

(島根大学法文学部社会文化学教授)

本書『宗教生活の基本形態』(以下、『基本形態』と略記する)は、フランスの社会学者デュルケーム晩年の主著 *Les formes élémentaires de la vie religieuse : le système totémique en Australie* (1912) の全訳である。本書は、オーストラリアのアボリジニ社会に見られるトーテミズムを対象とした宗教社会学の書であり、社会学のみならず、人類学や宗教学にも大きな影響を与えてきた。しかし従来、その内容が十分に理解されてきたとは、必ずしも言い難い。

本書にはすでに邦訳があったが(古野清人訳『宗教生活の原初形態』上下、岩波文庫、1975年)、これは80年以上も前の訳の改訂版であり、時代的制約もあってきわめて読みにくい。そもそも表題中のélémentairesを「原初的」と訳すこと自体が誤訳であって、トーテミズムという「原始宗教」のモノグラフとしての側面のみが強調される結



果になってしまった。けれどもデュルケーム自身の意図は、トーテミズムを素材として、いわば共時的・構造論的に、すべての宗教に共通する本質、その基本的な形態を明らかにすることに向けられていたのである。

またデュルケームは一貫して宗教現象に関心を寄せていたが、彼の初期の主著である『社会分業論』(1893)や『自殺論』(1897)での視点と、『基本形態』での視点とはまったく異なっていた。近代社会のアクチュアルな問題を直接のテーマとする前2著では、「社会科学」の視点から社会的な統合や規制との関連で付随的に宗教が扱われて

いたが、『基本形態』では、「宗教とは何か」の解明がテーマとされ、人間にとって宗教がもつ意味を問う「人間科学」の視点に立っていた。認識論的カテゴリーの宗教的起源を論証する認識社会学の議論が本書に組み込まれているのも、そのためである。こうして本書は、膨大な民族誌の検討に基づいてトートミスムの全体像を提示しながら、宗教のもつ人間の意味を論じ、さらには哲学的な認識論の問題にまで及ぶ、きわめて多岐にわたる議論を含んでいた。本書の読解が一筋縄にはいかないゆえである。

この新訳で私は、このように多様な性格をもつ本書を、デュルケームの意図に即した形で、できるだけ忠実に現代の日本語に移し替えようと試みた。その成否は読者の判断に委ねるしかないが、ここでは、この新訳の特色について2点ばかり触れておきたい。

一つは、膨大な参照文献の書誌情報の確認作業である。実は原著で示された書誌情報はかなりいい加減であり、誤りがきわめて多い。1995年に出た新しい英訳*The Elementary Forms of Religious Life*, Free Press, 1995 (translated by Karen Fields) ——最初の英訳は1915年に出ている——では、この点が大幅に改善されたが、今回の新訳ではさらにそれを補充・修正することができた。これはひとえにイ

ンターネットのおかげである。欧米の図書館では文献の電子データ化が進んでおり、Internet Archiveやフランス国立図書館のGallicaなどのWebサイトを活用することで、研究者の著作はもちろんのこと、19世紀の宣教師や探検家による世界各地からの報告まで、多くの一次文献を直接確認することができた。

もう一点、実は原著では、1912年の初版、デュルケームの死後1925年に出版された第2版、さらに1960年に出た第4版（現行版）のあいだで、かなりの数に上る異同が確認される。とくに第2版では、おそらくデュルケームの甥のマルセル・モースの手になると考えられる表現上の修正がかなり見られる。また1行まるまるの脱落部分が5カ所もあり、それ以外にも多数の新たな誤植が見られる。さらに第4版で新たに生じた誤植も多い。この事実はフランスでもほとんど取り上げられたことがないが、この新訳では、版によるこれらの異同を訳註等で逐一指摘している。

最後に一言。デュルケームを知らずして社会学は語れない。そして本書を読まずしてデュルケームは分からない。社会学や宗教に関心を寄せる人には、改めてこの新訳を繙かれるよう、お勧めしたい。



自著紹介

『シェイクスピア劇の道化』

(英宝社、2014年4月)

西野義彰

(島根大学法文学部言語文化学科教授)

W. シェイクスピアはイギリスを代表する劇作家で、生涯に37作品を書いたと言われる。同時代の優れた劇作家としてC. マーローやB. ジョンソンなどが挙げられるが、彼らは主に悲劇又は喜劇という一つのジャンルで才能を発揮したのに対して、シェイクスピアは歴史劇、喜劇、悲劇、及びロマンス劇の四つのジャンルで優れた作品をいくつも書いたので偉大な劇作家と評価されている。彼は様々な言葉や技法を駆使して人間の本质や人生の実相を鋭く捉えるとともに、王侯貴族から社会の底辺に生きる人々まで、多様で個性豊かな人物たちを創造し劇の中で活躍させた。

シェイクスピアの劇には魅力的な主人公がたくさん登場する。他方で、冷酷非情な悪党から温厚で心優しい善人、教養や分別に欠け愚かな言動で笑いを誘う人物まで、様々な

脇役が登場し劇世界を豊かにしている。筆者はこれらの脇役の中で笑いとユーモアに接点を持つ滑稽な人物たちに関心を持ち、道化という視点から彼らの特徴と劇における役割について考察した。本書で「道化」という言葉を最もよく用いているが、それは「阿呆」、「愚者」、「フール」などと交換可能なものとして考えている。シェイクスピアの劇には道化と呼ぶことのできる多様な人物が登場するが、本書で取り上げた道化は、筆者の個人的な好みと、程度の差はあれ彼らの劇における比較的重要な役割という理由で選んだものである。彼らを二つに分類すると、独特の道化服を着た賢い宮廷道化（又はお抱えの道化）と、道化服は着ていないが機知に富み当意即妙の返答で相手を感じさせたり、教養に欠け滑稽で愚かな言動で観客の笑いを誘う道化に分かれる。シェイクスピア

が創造した最大の喜劇的人物サー・ジョン・フォールスタフは後者の代表と言える。

宮廷道化は王侯貴族に雇われ、教養豊かで非常に機知に富む賢明な道化であり、彼らの主な仕事は主人に笑いや娯楽を提供したり、見事な機知問答によって相手の愚かさを指摘し感心させたりすることである。彼らは職業上あえて屈辱的な阿呆の衣服をまとった知恵者なのである。本書では、第4章の道化タッチストーン（『お気に召すまま』）、第5章の道化フェステ（『十二夜』）、第7章のリアの道化（『リア王』）などがこれに相当し、それぞれの特徴について論じた。

歴史劇の『ヘンリー4世』1部・2部に登場するサー・ジョン・フォールスタフは宮廷道化とは全く異なるタイプの道化で、これまでの放蕩生活により脂肪の塊というべき人物である。彼は非常に機知とユーモアに富み、窮地に追い込まれると彼の才能が一際発揮され、巧みに対応して切り抜ける。彼の言葉と行動は非道徳的で自由奔放、我々がやりたくても出来ないことを大胆にやっただけのける。彼はその巨体の中に虚と実、理性と欲望、賢と愚、笑いとユーモアなど様々な要素を内包した複雑

で不可解な人物であるが、本書の第2章で彼を道化という視点から分析し、その尽きない魅力や特徴について考察した。

前述の道化と比べると遥かにマイナーであるが、教養に乏しく愚かで滑稽な言動によって笑いを誘う喜劇における道化として、第1章でボトム（『夏の夜の夢』）、第3章でドグベリ（『から騒ぎ』）を取り上げ、彼らの面白さと特徴について論じた。『夏の夜の夢』にアテネの職人たちが登場し、公爵の結婚祝いに劇中劇を演じることになるが、無器用で猥雑な連中が芝居を演じるために、愉快なドタバタ劇になる。彼らの中で機織りのボトムが一際目立つ存在になっている。他方、ドグベリは愚かな警官として登場し、マラプロピズム（滑稽な言葉の誤用）をくり返し、的外れな事をしばしば話すことで失笑を買う。彼らはいずれの劇においても脇役であるが貴重な存在である。

同じグループに入るが悲劇に登場する道化として、第6章で墓堀り（『ハムレット』）、第8章で門番（『マクベス』）、第9章で田舎者（『アントニーとクレオパトラ』）について考察した。彼らに共通するのはコミック・リリーフ（喜劇的息抜き）

で、それまでの悲劇的な出来事により観客の心に鬱積した極度の緊張を解きほぐすことが彼らの主たる役割である。彼らの登場と台詞の量は大きく限定されているが、各々がそれぞれの立場で洒落や冗談を言ったりたわいもないことを話す。また、彼らは無意識に主人公の生き様や劇の中心主題に関係することを語る。この意味で、それぞれの場面が劇に有機的に組み込まれていて、単なるコミック・リリーフの域を超えていると言える。

ロマンス劇では『冬物語』の道化（羊飼いの息子）に注目し、第10章でその特徴について考察した。彼もさほど教養は無く、純朴で心優しい人物であるが、愚かで滑稽な言動によって観客に笑いを提供し、喜劇的な側面に貴重な貢献をしている。彼

の台詞の量と登場の回数は前述の3人よりも多い。また、彼の場合、父親とともに筋の展開に大きく関わるよう設定されていることも特徴と言える。

最後の補遺では、道化の言葉というテーマで、タイプの異なる2人の道化（賢明な職業道化と粗野で教養のない田舎者）を取り上げ、彼らの言葉における特徴について考察した。全ての道化に共通するが、難しさの一つは、彼らの洒落やマラプロピズムなどを正確に理解することで、自力で分かるのはそれらの一部であり、大部分は使用テキストの注に教わった。他の人物の台詞や文体にも言及しながら、フェステ（前出）とランスロット・ゴボー（『ヴェニス商人』）の言葉における特徴が浮彫になるよう努めた。



## 原稿募集

### —『淞雲』原稿執筆の手引き—

#### 1 編集方針

本誌は、島根大学学術情報機構附属図書館が編集・発行する雑誌です。本誌は、島根大学附属図書館の利用者である学生及び教職員を主な対象読者として、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果や附属図書館の活動報告、資料紹介等を掲載します。学生や教職員の皆様からの投稿も広く受け付けます。

#### 2 投稿規定

##### (1) 原稿の種類

島根大学学術情報機構附属図書館及び大学図書館、公共図書館など図書館に関する内容の調査・研究成果や活動報告、資料紹介等で、次の種類に該当するものとします。

- 論文 図書館及び図書館資料に関連するオリジナルの研究論文
- 報告 図書館業務・サービスに関連する報告、図書館資料に関連する報告（資料紹介など）
- 短報 本学教員自著紹介、書評、図書館に関連するショートエッセイ
- その他 館長が必要と認めるもの

##### (2) 原稿の提出・問い合わせ先

電子メールで次の提出先に提出してください。

##### ・提出先

島根大学学術情報機構附属図書館広報チーム（『淞雲』編集委員会）

e-mail : library@lib.shimane-u.ac.jp

TEL : 0852-32-6088 （内線）2780

##### (3) 原稿の査読

本誌に掲載する記事は、内容に応じて編集委員会または、編集委員会が依頼する査読者による査読を行い、査読結果に応じて、著者に対して、原

稿の修正、改善をお願いすることがあります。

(4) 著作権

本誌に掲載された記事の著作権は、著者に帰属します。ただし、本誌は冊子で発行するとともに電子版を公開するため、事前に電子化に伴う複製及び送信可能並びに公衆送信を許諾していただきます。

(5) 校正

初校のみ著者校正をお願いします。

(6) 学術情報リポジトリSWANへの掲載

掲載された記事は、島根大学学術情報リポジトリSWANへ掲載し、インターネット上に公開します。

(7) 掲載原稿の取扱い

提出された原稿は、原則として返却しません。

(8) 謝礼

執筆者1名につき、掲載号1部とご希望により別刷り20部まで贈呈します。

### 3 原稿執筆要領

(1) 原稿の形式

原稿の本文はテキスト形式、MS-Word、または一太郎形式とします。図表は、本文とは別ファイルとし、形式は、JPEG、BMP、GIF、PSD形式とします。

(2) 原稿の長さ

本文の長さは、記事種別に応じて、概ね次のページ数（図表、写真含む）に収まるようにしてください。

A4判 1ページあたり46文字×48行（2,208文字）

\*刷り上がりはA5判となります。

論文・報告 2～10ページ以内

短報 1ページ

(3) 原稿の書き方

①文章はわかりやすく、冗長にならないよう簡潔に表現してください。

②文章は「である」調、「です・ます」調のいずれでも可とします。内容

にふさわしい文体としてください。

- ③章・節・項などの見出しをつける場合は、原則としてポイント・システムを使用してください。

例) 第1章 → 1

第1章、第1節 → 1.1

第1章、第1節、第1項 → 1.1.1

項以下の細分 → (1)

- ④写真、図、表には、例のようにそれぞれ一連番号と簡潔なタイトルを付し、本文中に挿入するか、または、挿入箇所を明示して、別ファイルとしてください。本文中に図、表を挿入する場合においても、図、表は本文とは別ファイルとしてください。

例) 図1 システム概要

表1 メタデータ項目一覧

- ⑤文献を参照または引用した場合は、本文の該当箇所の右肩に、1)、2)、3) …のように一連番号を付して、本文末尾に参照文献・引用文献の書誌事項を記載してください。参照文献・引用文献の記載方法は、原則として「科学技術情報流通技術基準. 参照文献の書き方 (SIST02)」(URL [http://sti.jst.go.jp/sist/handbook/sist02\\_2007/main.htm](http://sti.jst.go.jp/sist/handbook/sist02_2007/main.htm)) に従ってください。
- ⑥他の著作物から転載する場合、及び図(写真を含む)、表を使用する場合は、事前に著作権者の許諾をとってください。



松雲  
Shoun

島根大学学術情報機構附属図書館報第17号  
平成27年3月27日  
発行 島根大学学術情報機構附属図書館



島根大学学術情報機構附属図書館

●本館  
〒690-8504  
TEL(0855)3216083  
松江市西川津町1060  
FAX3216089

●医学図書館  
〒693-8501  
TEL(0853)202092  
出雲市堀谷町89-1  
FAX202095